
俺の幼馴染が凶悪すぎる

人間に銃器

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の幼馴染が凶悪すぎる

【Nコード】

N1376W

【作者名】

人間に銃器

【あらすじ】

これは千冬に男の幼馴染がいたら、という妄想を詰め込んだ息抜き作品です。過度な期待はしないでください。

こんな凶悪なヤツが俺の幼馴染でいいんですか？（前書き）

やっちゃった……。。

後悔はしてない。反省はしてる。

やるだけやってみる。作者は無理をする生き物ですがよろしくお願
いします

こんな凶悪なヤツが俺の幼馴染でいいんですか？

「おい、起きろ馬鹿者！」

「ん……。 は！？な、なんでお前がいるんだよ！」

「起こしに来てやったというのにそんな態度を取るのか？自分の幸せを感じられない人間は犬畜生にも劣ると言うのを知らんのか？」

へえ、不法侵入してきて無理矢理叩き起こされることが幸せなんて15年間生きて来て 厳密に言えば30年以上は生きているが、一回死んだし、間違つてなくもない 俺は初めて知つたぜ。出来ればもっと優しく起こしてくれよ。

そうすれば幼馴染が寝坊しそうな幼馴染を起こしに来るといふイベントを噛み締められそうだ。
まあこれでもかなり丸くなった方なんだよな、こいつは。中学時代なんか思い出さたくないくらいにやばかった。これが俗に言う黒歴史か。

「で、朝っぱらから暑苦しいんだが、離れてくれますか？」

残暑のせいで扇風機回しながら寝ても汗だくだもんなあ。

今日から新学期だつて言うのに、イヤになるぜ。

因みに汗臭い男のそばに女子がいるというのも男として気が引けるので、今のは俺なりの配慮だ。

でも、まあ、あれだ。幼馴染の性格は把握しているつもりだったんだが、なんでこんなこと言っただろうな。

「ほう、そんなに私が傍にいるのがイヤか？」

そこまですごんで言われると、切り返しづらいものがあるわけで。

「……じゃあお前は俺に傍にいてほしいのか？」

「そ、それは……！」

「そういうことだ。シャワー浴びてくるからすまんが布団干しとい
てくれ」

そこはお世辞でもいてほしいと言ってもらえると有り難かったんだ
けどなあ。

本気で渋るあいつの顔を見るとそんなことを聞いた俺が悪いみた
いじゃねエか。

「……べ、別に私はお前が傍にいることなど気にしないのだが。む
しろいてくれというか……」

「ん？なんか言ったか？」

「な、なんでもない！さっさとシャワーを浴びて来い！馬鹿者！」

なんでそんなに顔を紅くして俺が怒られないといけないんだ。

小さい声で喋るから聞き返したただけだっていうのによお。

「馬鹿者馬鹿者って……俺には坂本辰巳さかもと たつみっていう名前があるんだ
け
ど」

しかもどつちかっつていうと俺の方が頭良いからな。勘違いするなよ、幼馴染。

「そのくらいは知っている。お前だって私の事を幼馴染としか呼ばないではないか。私には織斑千冬という名前があるのだぞ？」

いや、知ってるし、なんで心の声を聞きとってるんだ。

「じゃあ千冬、布団干しといってくれ、頼むから」

「お、おま……た、辰巳もさっさとシャワーを浴びて来い！一夏を待たせているのだぞ!？」

はいはい、ブラコン乙。

確かに小学1年のこいつの弟はかわいいが、千冬は執心過ぎる。

「（な、なんだこれは……。ふ、夫婦の様だな……。わ、悪くはないかもしれん!）」

なんだか上機嫌で鼻唄を唄う千冬に寒気を感じながらも、その寒気を洗い流すために俺は熱いシャワーを浴びた。

ついでに髪も洗って、ドライヤーで乾かす。

髪は短いけどドライヤー使わないと毛先がボサボサになるからな。

俺はああいうのがキライなんだ。チクチクしてムカつくから。

「な、なんて格好で出てくるんだっ!」

……は？なに顔を紅くして恥ずかしかってたよ。

俺の部屋で俺がパンツ一丁になってなにが悪いんだ。

「うるせえなあ。恥ずかしいなら見んなよ」

「め、目に入るのだから仕方ないだろう！」

なんでそこまで意固地になるんだ。

手で目の周りを覆いながら隙間から覗く意味はあるのか？

別に俺は見られる事はなんとも感じないから勝手にしてくれ、という感じなんだが。

「わかったわかった。ズボン履けばいいんだろ、ズボン」

高校の制服は……あつたあつた、これだな。

グレーの地に緑と赤のチェックとかいつ見ても趣味悪過ぎるだろ。

普通に黒でよかつたんじゃねエの？

「男子ダサ過ぎ……。それに引き換え女子は良いよな。めっちゃめちゃかわいいじゃん」

男子は上も紺のブレザーに赤いネクタイという普通な感じだからな。女子はかわいいぞ。絶対優遇されてる。女尊男卑が世に迫ってる感じがするぜ。これ予言だから。たぶん当たる。

千冬の制服姿もなかなか様になっているし、かわいいよなあ、ホント。制服が。

「か、かか、かわ、いい……だと？」

「おう、かわいいだろ」

「そ、そんなことくらいで私は……別に……。う、嬉しくなどないからなっ！？」

「そ、そうか。それはすまん」

嬉しくないならそれはホントに申し訳なかった。

千冬はそういうの苦手だもんな。どっちかっていうとスーツが似合うだろ。

あつ、別にフリルとかが似合わないとか言ってるわけではないぞ？
そうだ。こんど千冬にフリルのついたワンピースでも着せてやろう。
面白そうだ。協力者もいるから不可能ではない。

「もう行こうぜ。一夏が待ってるんだろ？」

「そ、そうだな。よし、行くか」

そんなにかわいいって言われたのがイヤだったのか？
動きがぎこちなさ過ぎるんだけど。でもなんか嬉しそうだよな。
うーん……わからん。千冬の事は全然わからんな。

「あつ、たつにーおっす！」

「おっす、一夏。夏休みの宿題ちゃんとやったかあ？」

「へへっ。たつにーのお陰でなんとか。それとまた来年海に連れて行ってくれよな」

「任せろ。今度は6人で行こうな」

「おっす」

この悪戯が好きそうなガキの織斑一夏は、俺のお気にいりでもあつ

たりする。

普通にかわいいんだもんなあ。千冬がブラコンになる気持ちもわからんでもない。

しかし俺にはそういう趣味はないので理解しておく様に。

6人って言うのは……まああれだ。篠ノ之姉妹だよ。

篠ノ之姉のお陰で千冬はだいぶ丸くなったから結構感謝はしてるんだ。その妹も一夏に負けじとかわいいから憎い。

それとあと1人はそのうちわかる。楽しみにしとけ。

「それじゃあ行くぞ。一夏、忘れ物はないな？」

「もう何回目だよ……。今日だけで5回は聞いたぞ」

「前に忘れ物をして先生に怒られたと泣いていたのはどのぐらいだ？」

「……ごめんなさい」

小学1年生相手に脅しを使うなよ。一夏が泣き掛けるじゃねエか。そんなことするから俺に懐くことがわからねえのか？

「一夏、安心しろ。お前の姉ちゃんもたまたま忘れ物するから」

「本当か!？」

「お、おい！辰巳！弟の前でそんなことをばらすな！」

わわっ！だからこれくらいで胸ぐらを掴むな！

弟に威厳のある姉でいたいのはわかるけど、ダメなところも見せておいた方が親近感がわいて、より弟の憧れでいることが出来るんだ

よ！

「そうか。そうだったのか。千冬姉も忘れ物するなら仕方ないよな」

「おい辰巳！これで一夏が平気で忘れ物をするようになったらどうするつもりだ！」

そんなに怒るなって。怖いから。

一夏も一夏で笑ってんじゃねエよ。姉の暴走を甘えて止めてくれ。

「そ、そんなことないって。な、一夏？」

「おう。忘れ物はしないよ。千冬姉もしてるから俺もしていいなんて理由にはならないからな」

「ほら、な？だからもう離してくれ。それと……近い……」

眼前3cmのところ千冬の鬼の形相だぞ？

鼻の先なんか当たってるし、そこからナイフが飛び出してきそうだから恐ろしい。

こういう人間凶器みたいな風に言ってるがな、千冬は美人なんだ。だから近いと恥ずかしいんだよ……。悪いか！

「ばっ……！！な、なにを顔を紅くしているのだ！不埒だ！」

「お、お前もじゃねエか！他人のこと言えるかよ！」

改めて言われると顔に熱がどんどんたまっていくのがわかる。

放射熱とか出てねエかな？大丈夫だよな？

俺だって青春真っ盛りの15歳だ。幼馴染で美人の女子を意識する

など言う方が無理ってもんだよ。

「千冬姉とたつにーラブラブっ」

「な、なにをバカなことを！」

「わわっ！千冬姉が怒った！逃げろっ！」

「お、おい待てー夏！くそっ……！お前もいつまでそうしているつもりだ！早く追いつけるぞ！」

「わっ！っつと、おい！」

顔を真っ赤にして俺の手を握って走りだす千冬の手には尋常じゃないくらい手汗が滲んでいたよ。
どういふことはわからないが、それだけは伝えておくぞ。

天才が本当に天災すぎて俺には災厄しか降りかかってこない(前書き)

キャラがぶっこわれますが気にしたら負けです

天才が本当に天災すぎて俺には災厄しか降りかかってこない

「箒！おはようー！」

「一夏か、おはよう。あつ……辰巳さん。おはようございます」

「おはよう、箒ちゃん」

うわぁ……。

朝からイヤなヤツと出くわす5秒前。

4、3、2、1

「たつく~~~~んっ！」

ガシッ！

「あ~~~~う~~~~」

……ふう。危ない危ない。

朝からうさ耳が俺に衝突して玉突き事故を起こすところだったぜ。思わずアイアンクローで封殺したが不可抗力だ。現在もめりめりと力を入れ続けているのも不可抗力に違いない。

「う~~~~うさ耳パワーっ！」

「~~~~で、逃げられるとも思ってたのか？」

自慢のうさ耳パワーというヤツで俺のアイアンクローから抜け出そうとするがそんなことはさせん。
更に握力を入れてこめかみを潰す。徹底的に。

「ちーちゃん見てないで助けてよ……」

「知らん。自分の責任だろうが。自力でなんとかしろ」

「なんでか知らないけどちーちゃんが怒ってる……。あつ、もしかして束さんがたつくと」

「束！……辰巳、そこを代われ」

「お、おう……」

すこみが違う、すこみが。

鬼の形相を構えた千冬が俺とアイアンクローを選手交代し、うさ耳のこめかみはさらに圧迫される。

まああつちは放っておいても勝手になんとかなるだろ。

「一夏、このたんこぶはなんだ？」

「これか？これは……ほら、千冬姉に拳骨されたんだ」

来る途中の出来事な。

小学生が高校生に、しかも織斑千冬に走力で敵う筈なく、すぐに捕まって後頭部に拳骨を　　と思っただが、千冬は本気で走らず一夏に追いつかない様に走り、一夏が疲れて立ち止ったところで拳骨を入れていた。

執行猶予を与える辺りがまた恐ろしい。

「それじゃあ2人とも行って来い。今日も1日頑張れよ?」

「おう!」

「はい! あつ、放課後、お見舞いに行っても良いですか?」

「ふふつ、是非。あいつも喜ぶと思うぞ。篝ちゃんはいいい娘だな」

小学生の微笑ましい友情に煽られて、つつい篝ちゃんの綺麗な髪を撫でてしまう。

篝ちゃんはずっとこのままのサイズでいてくれないだろうか。変な意味はなくて。

「それじゃあ行ってきますっ!」

「ああ、行ってらっしゃい」

俺に褒められたのが嬉しかったのか、笑顔で一夏と一緒に走っていた。

よっこらせ。

子供と話す時は目線を合わせるのが常識だからな。相手が子供だからって上から話すのは失礼だし、同じ目線の方が親近感をもてるんだよ。

しゃがむのはキツイが、それくらいは自然と出来る様になるべきだぜ。

「辰巳、そろそろ行くぞ。学校に遅れる」

「そうだな。それで……そこで泡を吹いてるヤツはどうすんだ?」

小学校の校門の前だぞ。

うさ耳が泡吹いて倒れているなんていう光景はトラウマになり兼ねない。

さっさとどうにかしないと苦情が来るぞ。

「置いておけばそのうち復活するだろう」

「そういう問題じゃねエだろうが……。仕方ねエなあ」

なんで俺がこんなことしなきゃならねえんだ。

やりたくないなら放っておけばいいんだが、そうもいかないだろ。

そういうことで背中に担いだのだが、乱雑にしたせいかうさ耳はかなり前のめりになっちまった。

ん？後ろからスカートの中が見えてる？

別にこのうさ耳なら問題ないだろ。女であって女じゃねエんだ。性

別うさ耳。秀吉的な新種族みたいなもんだよ。

それにこいつなら見たヤツの視線に反応してレーザーを射出する機械とかスカートの中に仕込んでそうだからな。

安心して見やがってくれ。

「お、おい！なにをしているのだ！そんなこと聞いてないぞ！？」

「何してるって、お前が気絶させるからいけないんだろうが。それに俺はなにも言っていないから聞いてなくて当然だ。っていうかなにをそんなに狼狽してんだよ」

「あ、朝から男女が路上で密着するなど不埒だっ！」

「じゃあお前が運べよ、めんどくせえ……」

朝から耳元ではしゃぐな。

女子の声は無駄に高いから高確率でハウリングを起こすんだよ。

「仕方ないな。……ん？どうした？早く渡せ」

「俺もそうしたいんだが……こいつが離れないんだよ」

「嘘を吐くな。束は確実に気絶している。早く寄越せ」

「嘘じゃないって。ホントに離れないんだ」

俺が嘘を吐いて良い思いをしようと思ったたって思ったヤツ、あとで殴る。

振り落とそうと思っても落ちないんだ。束が俺の体のどこかを掴んでる感じはない。

「よし、千冬。後ろから引っ張ってくれ」

「仕方ないな……」

「「せーのっ！」「」

後ろから千冬が思い切り引っ張り、俺も前に思い切り体重を掛けるが離れる気配なし。

というか束と一緒に俺の服も一緒に引っ張られているのは気のせいではないよな。

「くっ………！なんだこれは！まるで接着剤でくっついていてるような……接着剤！？」

「ああ、なんかこいつなら有り得そうだな……」

1学期の間でこのくらいはもう俺も千冬も慣れたわ。

この天災にかかれれば俺がこうすることはわかっていたんだろう。

「もう行こうぜ。ホントに遅れちまつ」

「しかし離さないといけないだろう」

「別にこのままでもいいだろ」

「お前はその状態のまま授業を受けると言うのか!？」

「普通に考えて受けられるわけないだろ。カッターだけ脱いでTシヤツで過ごせばいいだけの話じゃねエか」

なのになにをそんなに焦っているんだ。

「……しかし辰巳と束がくつついたまま学校に向かうと言うのは積然としないというか、羨ましいというか……」

「どうした？」

「ええい！貴様などこうだ！こうして学校に連れて行ってやる！異論は認めんぞ！ふはははは！」

ちよつと待て！お前小学校の前でそんなデカイ声を出して笑うな！ほら、なんか小学生からも教員からも白い目を向けられてるから。別にお前が俺にくっ付いてきた理由は詮索しないが、目立つからそ

んなに高笑いするのだけはよせ。

「はあ……勝手にしろ」

面倒事だけは起こしたくないので、変に目をつけられる前にその場を去った。

もう目をつけられてる？はは、冗談……だよな……？

まだ15だぞ？そんなこと考えたことないし、お前ら2人は却下だバカ

ざわ……ざわ……

「聞いた？篠ノ之さんがまた変なモノ開発したらしいよ」

「聞いた聞いた！ISだっけ？意味わかんないよね」

「しかもあの2人もそれに付き合っって各国を飛び回ったらしいぜ。結果は散々だったけどな」

『はははははっ！』

教室の前に佇み、中から聞こえる声を静かに聞く。

「……………」

「気にすんな。気にするだけ無駄だ。言わせたいヤツには言わせとけ」

千冬の悔しい気持ちはわかるぞ。

友達のことを馬鹿にされたんだ。俺だっけ今すぐぶっ飛ばしてやりてエよ。

それがクラスメイトだろうが関係なくな。

「しかし束はなにも悪くないのにバカにされているのだぞ！？それを黙って見過ごすなど出来るものか！」

「うん、そうだよ。でもそれじゃあ意味無いだろ。力に任せて暴力を振るって黙らせるんじゃないやあ、陰口を言うあいつらとなにもかわらねエ。飽く迄正攻法で、こいつを認めさせてやらないと」

束は一種の病気みたいなもんだよ。

頭が良いヤツってというのは人と見える世界が違うから理解されにくいんだ。

壁にぶち当たることがなく、見た瞬間に最良の答えを導くことが出来ることがどれほど苦痛かわからないだろ。

それを経験したことないヤツは『羨ましい・妬ましい』や『贅沢な悩み』なんて言うがな、これほど人生が詰まらなく感じるものはないぞ。

だからこいつはその退屈な人生を退屈じゃなくすために色々開発してるんだ。

暇潰しみたいなものなんだろうけどさ、それに付き合ってるのも友達だろ。

「しかし正攻法など……そんなものはあるのか？束の研究の成果は認められることなく一蹴されたのだぞ？あるのなら束がもう既に試している筈だろう」

「こいつの当初の『宇宙空間での活動を想定したマルチフォームスーツ』としての運用とは異なるがな、あることにはある」

「本当か！？ならば今すぐにでも」

「まあそう焦るな。とりあえず学校が終わったら説明するから、お前は今日一日どんなことを言われようが我慢すること。いいな？」

「わ、わかっている。私だって簡単に暴力に訴えたりはしない」

どの口がそんなことを言うんだ。

俺に対してはすぐに暴力じゃないか。

まあそれはいいとして、東の研究の成果が認められなかったのには俺の責任もあるんだよ。

ISは『女性限定』でしか扱えない筈だったんだ。

それをいきなり男である俺が例外的に起動させたから『欠陥品』としてのレットルが張られたというわけ。

全部とはいかないが、俺の責任はかなり大きい。

それに各国もISなんて認めたくなかったんだろう。それ1つで世界を変えられる代物をそう簡単に認めるわけがない。

たぶんだが、その自尊心のお陰で夏休み中に一気に各国の兵器の大量生産が進んだ筈だ。

それを利用して飽く迄『正攻法』としてISを世界に認知させてやる。

がらがら……

東をおんぶしたまま教室に入り、視線がこっちに集まるが気にしない。

そのまま歩いて最後列の窓際に固められた俺たちの席へと移動しようとしたときだった。

「キチガイ3人仲良く登校かよ。坂本はそんな女子2人に囲まれてリア充気取りか？」

俺の悪口ならいくらでも言ってる、禿げ。禿げてないけど、禿げで良いんだよ。

っていうかリア充気取りのキョロ充、しかもお前みたいなDQNに

言われたくないわ。

よくわからんが、その俺の悪口が引き金だったらしく、東のうさ耳がピコピコと動き、一瞬のうちにその男子へと詰め寄り、小型レーザー銃を突き付けた。

おい、物騒なものを日本で持ち歩くんじゃないよ。

それより接着剤があるのにどうやって抜け出した　　ってあいつ下着姿でなにやってんだ！

「ヒッ………！」

「やめろ東！」

「……チッ。たつくんがそういうから今回は見逃すけど、次ちーちやんやたつくんの悪口言ってみる。社会的に抹殺するぞ」

いや、今のは社会的でも抹殺でもなくただの殺人の予兆にしか見えなかったんだが、それは俺だけだろうか。

っていうか男子も男子だ。俺たち3人は学校でも異端とされてるんだから関わるうとしなけりゃいいのに。

死に急ぎたい年頃ですか？

「東、お前服はどうすんだよ」

「きゃんっ　見ていいんだよ。ほらほら。たつくんなら特別に触ってもいいよ!？」

「黙れバカ。思春期女子がはしたないこと言っんじゃないよ」

俺は断じて見ていないからな。頭わになった豊満な胸で構成される谷間を凝視したりはしていないはずだ。

「辰巳、どこを見ているのだ？」

「ってなにをしている！」

「ち、ちげえよ！俺は悪くねエ！悪いのは押し倒してきたこいつだ！」

朝っぱら学校の教室でそんなことしてくるヤツがあるか！

しかも束は上半身下着だけだぞ？なに考えてんだ。

「にゃふふ〜。これでたつくんは束さんのものだね。好きにしていんだよ……？」

普通逆だろ、体勢的に。

これじゃ俺が好きにされる立場じゃねエか……って冷静に突っ込んでる場合じゃねエ。

「束エ！そこをどけ！うらやま　ゲフンゲフン！けしからん！成敗してくれる！」

「わあっ！？今羨ましいって　」

「ふふふふふ……」

「た、助けてたつくん！束さん怖いよ！不敵に笑うちーちゃんが恐いよー！」

なんで起き上った俺の背後に隠れるんだよ。

千冬は怖いくらい心の底から笑ってるから止められるわけがない。

幼馴染っていうのはな。男が尻に敷かれてる場合の方が多いんだ。

しかも何故か千冬は日本刀を構えてるし……積んだんじゃね？

「や、やめる！俺まで巻き沿いにする気が！？」

「元はと言えば束の服と自分の服をくつつけた辰巳が悪いだろう…
…？」

「り、理不尽だ！あんなところで放置していたら教育に悪いだろうが！俺は健全な小学生を守るために仕方なくやったんだ！」

「でも束さんのうさ耳リーダーによると束さんのおっぱいが背中に当たってから心拍数が20ほど上昇したらしいよ、ちーちゃん！やったね束さん！」

「ほづ、どういふことが説明してもらおうか……」

「そ、それは健全な男子高校生としての当然の結果じゃないのか！？」

束も俺に責任を転嫁しようとして適当なことほざいてんじゃねえよ。いや、確かに下心がなかったとは断言できないけども。

だって束のおつきいんだもん。そりゃ反応しますわ。あつ、千冬のもなかなか　　なんてエロイ事考えてる場合じゃねえ！

ヒュンツ！スパンっ！パリンツ！

しゃがんで避けたのはいいとする。

しかしガラスが真っ二つに切れて下半分だけ床に落ちて割れるって
いふのはどういふことだ？

力が加わった衝撃でガラスにひびが入った形跡すらない。

つまり、だ。千冬の剣速は弾丸より速いということになる。

因みに弾丸はものによるが秒速1500mだ。当たれば俺も真つ二つだな。

「お前……それだけはやめろ」

「黙って切られる」

「俺はもつと青春したいんだ！」

「死ね」

「お前らとずっと一緒にいたいんだ！こんなところで殺されるのはごめんだ！マジで頼む！ホントに！お願いしますだ！」

もう恥も外聞も関係ない。そもそも忌み嫌われながらも学校に通ってるんだから外聞なんてどうでもいい。

とにかく土下座だ。これをすれば日本人ならこころを通い合わせられる。

「ん……んん！そ、それは本当か……？」

「な、なにがでしょうか？」

「わ、私達とずっと一緒にいたいということだっ……！！」

なんで顔を紅くしているのかわからないが、その台詞は千冬の心を打ったんだな。

本心を言っただけでよかったぜ。

「あ、当たり前だ。お前とも束ともずっと一緒にいたいじゃあな」

……!」

勢いだから言えたんだろう。

改めて言わされるととても恥ずかしい。

「そ、そうか……。私も　「感動した! 東さん感動したよ! ずつとたつくんのそばにいてあげるからね! お墓の中でも一緒だよ! 結婚しよう!」　東エ! 言葉を被せるなど何度言えばわかるんだ! それになんだ、今の言葉は!」

「プロポーズだよ! ね、たつくん」

「知るかボケ。俺はまだ15なんだから結婚する気はねエ」

「大丈夫! 法律の改定なんてちよちよいのちよいだから!」

「そういう問題ではないだろう! 辰巳は……その……」

「ちーちゃん顔真っ赤あ〜!」

「う、うるさい! とにかくだな、こういうのは辰巳の気持ちを尊重すべきだから、な……。た、辰巳はその……東と結ばれたい、のか……?」

……不覚にもこの凶悪な幼馴染をかわいいと思ってしまった俺は悪くない。

だってあの千冬が上目遣いを使ってくるんだもの。

今まで束のレーザーでビビっていたクラスのみんなもこっちの会話に耳を傾けてるし。

「考えたことねえよ、そんなことっ！もうその話題はなしだ！」

「現実逃避しちゃダメだよ、たっくん。ほらほら、東さんは魅力たっぷりだよ」

「だ、だから東はその格好で辰巳に擦り寄るな！」

……落ちついて考えてみればこいつら2人と結婚なんてどう考えても地獄でしかねエぞ。

結婚すれば人は変わるといっが、どうだか……。

とにかく今の俺にはこの2人はないということだけは伝えておこう。

幼馴染が素直だと……！？くそっ、なんだこの胸の高鳴りは！ヤツが来るのか！
息抜きで書いているつもりなんですが日間1位という名誉を頂きま
した

読者のみなさんのおかげです

これからもよろしく願います

幼馴染が素直だと……！？くそっ、なんだこの胸の高鳴りは！ヤツが来るのか！

『悪い。今日はいけないうつて伝えておいてくれ』

『わかりました。でもなんでですか？』

『ちよつと用事。悪いな、こんなこと頼ませて』

『いえいえ、私は辰巳さんのことを本当の兄の様に思っていますか』
『う』

『ありがとな。そういうことなら兄と呼んでも構わんぞ？』

『いえ、それは恥ずかしいので……』

これ、篝ちゃんとのメールのやり取りの一部ね。

何気なく言ったことをやんわりと拒絶された事が俺のハートにはかなり響いたよ。小学生に気を遣わせるってどんだけだらしのないかさ。そういえば小学1年生なのに携帯を持っているというのはどうなんだろう。

篠ノ之パパはかなり厳格な人だから、どうせ束特性なんだろうな。ちなみに一夏も持つてるらしいぞ。こっちはブラコンの心配性のせいと見て間違いない。

「今失礼なことを考えなかったか？」

「いや、そんなことはないぞ」

なんでこいつは読心術を会得しかけているんだろうか。
俺も読唇術くらいなら出来そうだが……無駄スキルだな。

「ちーちゃん、いつくん。それで話ってなにかな？」

「ああ、ISの件だよ。せっかく東が発明したんだ。どーんと世界に見せつけてやりたいじゃねえか。だから俺は考えた。どうすれば認めさせることが出来るかってことを。ISってのは本来宇宙空間での活動を想定したマルチフォームスーツだろ？しかし俺たちだけで宇宙空間での活動風景を披露するなんて不可能だ。金が掛かり過ぎる」

「そこで、だ。東には悪いが、ISを兵器として運用する方針で世界に見せつけることを考えた。現代兵器ではISの装甲を貫通することは不可能。ISにはISでしか立ち向かえない。それを証明すればいい。これくらいなら俺たちだけでも出来るしな」

「しかしそんなに都合よく現代兵器とISをぶつけることなど出来るのか？」

「出来るよなあ、東？ここまで言えばお前ならわかるだろ？」

「うんうんっ！たっくんも東さんと同じこと考えてたんだね！以心伝心だね！」

以心伝心はなによりだがくっついてくるな。暑苦しい。
残暑を見舞ってくれ。

同じことを考えていながら言わなかったのは俺や千冬を巻き込みたくないからだろう。

変な気遣いなんて要らないっていうのに、バカじゃねエのか。
まあその優しさは有り難く受け取るよ。

「2人だけで会話を進めるな！私にもわかるように説明しろ！」

「だから、各国の軍事施設をハッキングするんだよ」「

見事にハモってしまったが気にするな。

これも以心伝心の賜物っていうことにしておいてくれ。

「なっ！？正気か！？そんなことをすればただでは済まんぞ！？」

たぶん、千冬は東の心配をしているんだろうな。

ハッキングしたことに足がつけば指名手配は必須。共同戦線を張った俺も千冬もただでは済まないだろ。

それに俺たちの家族もな。

「心配するな、千冬。東を信じろ」

俺もハッキングくらいなら出来るんだけどな。

束ほどではないし、たぶん捕まる確率の方が高い。

その分束は安心だ。こいつが足のつくような真似は絶対にしない。

「し、しかし……」

「イヤなら参加しなくても良い。お前が大切な弟を守りたい気持ちもわかる。半端な覚悟なら邪魔になるだけだ。お前がいなくても俺と束だけでもやってみせるから帰っていいぞ」

本当は千冬がいないと成功しないだろうが、ここで甘い声を掛ける

のだけはダメだ。

そんな気持ちで参加されたらそれこそ本末転倒になっちまう。たぶん束もそれをわかってるんだろう。千冬を辛辣な言葉で罵倒する俺を黙って見つめているからな。

「な、舐めるな！辰巳と束には私が必要だ！それを思い知らせてやるためにもやってやろう！家族も友達の想いも守ってみせるっ！」

そう言うとなわかって煽ったんだけどな。決心がついたならそれでよしとするか。

「……それじゃあ作戦会議に移るぞ。束、ISは現在2機あるんだよな？」

「うん、そうだよ！試作機として夫婦ISを作ったからねっ」

「あっ」

「よし、じゃあ束がハッキングしてミサイルを日本上空に向けて撃ちだしてくれ。それを俺と千冬で全弾叩き落とす」

「でもその後に確実に各国から戦闘機が送られて来るよね。それはどうするの？」

「うっ」

「それも叩く。ISはISでしか対抗できないことを証明するためにな。でも殺すのはなしだ。『殺せる力を持っていても殺さない』ってのは大事だろ。恐怖心を煽れるからな」

「ま、待て！わ、私の今の台詞にはなんの反応もなしか！？」

さつきから会話に入ろうとしては入れず仕舞いで、こいつはなにがやりたいんだ。

別にそんなに「わあおっ！千冬さんすっげえ！」ってなるほどの台詞でも無かったからスルーしただけなんだけど、構って欲しかったのか？

「当たり前だろ。俺にも東にもお前が必要だ。言わなくてもわかれよ、そのくらい」

「そうだよ、ちーちゃん！まず第一この作戦はちーちゃんがいないと成功しない様に最初から立てられてたから。ね、たっくん？」

「そもそも俺だけでミサイル全弾撃ち落とせるようならお前を誘ってないって」

2人合わせてちょうど撃ち落とせて、更に2人で各国戦闘機を撃墜出来る様に頭の中でシミュレーションしてたからな。

その分束には無理してもらうつことになるけど、こいつのためにやってるんだからそのくらいはしてもらわないと割に合わない。

「なんで、なんでいつつそんなにずるいんだ……！下げて上げるなんて卑怯だぞ……！すこし寂しかったじゃないか……」

別に下げたつもりはないんだけどな。

そう思わせちまったんなら悪かったよ。

「いつまでも立ってないでお前も参加しろ。わからないことがあっても後日教えるなんてことはしないからな。1回で憶える」

「素直なちーちゃんに照れ隠しでそっけなくするのかな、たっくん？」

「そ、そうなのか……？」

「ちげエよ、バカ。いいから聞け。俺は何度も同じことを説明するほど優しくねエぞ」

「照れ隠しだ〜！ちーちゃんちーちゃん！たっくんの顔が赤くなってるよ！」

「ふふっ、本当だな。いいものが見れたから許してやるっ」

別にお前に許される必要はないし、そんなに怒らせることを言った憶えはない。

そして人を見せものみたいに言うな。

「うるせえなあ。説明しないままぶっつけ本番にするぞアホ共」

「これも照れ隠しだな。うん、幼馴染の私にはわかるぞ。素直になっってはどうか？」

「いい加減話を進めたいから黙ってくれ……」

その後もなんやかんやと2人が俺を弄って来て、結局作戦の説明が終わったのは8時を過ぎたころだった。

ああ、ウザかった……。女子らしい千冬も好きだが、俺を弄って来るのはダメだな。

「たつくん、ちーちゃん。ありがとね」

「なに言ってるんだ。それは終わってから言うセリフだろうが」

「じゃあ前払いとして今日は東さんのお家でご飯をご馳走してあげよう！にやふふ。久し振りに東さんが腕を振るっちゃようよ！？」

「そうだな。一夏も今日はそっちに行っておく様に連絡しておいたからご馳走になろう。辰巳も行くだろう？」

「まあ……うん。たまには悪くないな。癪だが東の料理は美味いし」
ホントに癪だが、こいつの料理はホントに美味い。

最初はどんな殺人料理が出てくるんだとビクビクしていたのは今となっては良い思い出。

「東さんはなんでも出来ちゃうからね！料理なんてちょちょいのちょいなさっ！」

そういうことで篠ノ之家に向かったのだが

「ま、眩しい……！」

ついでみれば俺たち3人の眼前には料理が並べてあった。

そしてそれを作ったであろう小学生2人の笑顔が眩し過ぎて直視できない……！！

くっ……！これがシスコンやブラコンになる理由か……。確かにこれは悶えちまう。

「お帰り、お姉ちゃん！いらっしやい、千冬さん、辰巳さん」

「篝ちゃん！これは全部篝ちゃんといつくんが作ってくれたの！？」

「うんっ、そうだよ！お姉ちゃんに食べてもらいたかったからっ！」

なんて姉想いな良い妹なんだ……！

束、俺にもそのかわいい生物を抱かせてくれ。頼むから。

「へへっ！たつにーに教えてもらったから完璧だぜ？ほら、千冬姉、食べてくれよ」

「う、うむ……。頂くとするか……」

千冬は恥ずかしいのか、一夏の方は直視せずに視線を泳がせながら生返事を返す。

俺が教えたっていうのは一夏に頼まれたからだよ。

「俺のために頑張ってくれている千冬姉に美味しい料理を食べさせてやりたいんだ！」って言われた時は思わず泣きそうになっちゃまった。

まだ子供なのにしっかりと姉の苦勞を理解しているいい弟だよ、一夏は。

「それじゃあ俺も頂こうかな」

「……………いただきます……………」

合掌をして各々が料理へと手を伸ばす。

一つの皿に乗っているものをみんなでつつく団欒な画はとても和む。さて、俺はこの肉じゃがをいただき……いたのだが、味が肉じゃがではなかった。

「お、美味しいですか？」

自信なさげに見つめて来る辺り、これは篝ちゃんが作ったんだろ
うな。

「うん、美味しいよ。でもまだまだ美味しくなると思うから頑張ろう
なっ？」

「は、はいっ！ありがとうございますっ！」

嘘はついてないぞ？

作った人の気持ちっていうのはな、本当に味になるんだよ。

お世辞にも肉じゃがと呼べないそれは俺には立派な肉じゃがだった。
それだけのことだろう。

「たつくんたつくん。はい、あーん」

「……なにやってやがる」

「あーんだよ、あーん！夫婦なら当り前だよ！」

俺とお前はいつ夫婦になったんだ。

「千冬姉、たつにーのこと東さんに盗られたのか？」

「ば、バカなことを言うな！辰巳は私に執心だぞ？」

「へえ。千冬姉はやっぱりたつにーのこと好きだったんだな！」

「ち、違う！断じて否だ！私はどうも思っていないのだがな。辰巳がどうしてもというなら仕方ない。ほら、口を開ける。食べさせてやるっ！」

「や、やめろ！その勢いで口に放り込まれたら箸が喉に刺さる！」

「とうか殺す気で突きさしてきているのではないのだろうかと思えるほどのスピードだ。」

「こいつは俺を殺したいのか。」

「明後日の朝刊の一面が『あーんをしていたら不慮の事故で亡くなりました』みたいなみっともない記事になるからやめろ。」

「たっくん！束さんが食べさせてあげるんだよ！」

「さっさと口を開ける！さもなければ腹を割って直接胃にぶちこむぞ！」

「お前らやめてくれ！飯くらいゆっくり食べさせてくれよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

その日の夜の俺の叫びは、間違いなくブラジルまで届いていただろう。

幼馴染「猫耳をつけてにゃんにゃん甘えれば幼馴染も私に甘えて……。ん、ん、ん

若干タイトル詐欺かもしれない。

後書でアンケート的になにかがあるかも

いつも通りキャラがぶっ壊れてるけど気にしたら負け

幼馴染「猫耳をつけてにゃんにゃん甘えれば幼馴染も私に甘えて……。ん、ん

【モノクロナイト】始動

無機質な機械音がそれだけ告げると、2つの閃光が夜天へと飛び立った。

一つは夜空の億万の星にも負けない輝きをもつライトホワイトな閃光。

一つは漆黒に闇と同化するほど暗いヘヴィブラックな閃光。

その2つが螺旋を描きながら、日本上空へと滑空する。そして

全てを打ち消した。

飛んでくる千を越えるミサイルも、撃墜せんとする戦闘機の数々も、世界の均衡も、平和も、軍事力も全て。2つの閃光が一夜にして全てを無に帰した。

しかしもつとも失いたくないもの・失ってはならないものだけは、誰一人として失うことはなかった。

その後は色々。そう、色々とあり過ぎた。

その色々は話すと長くなるので割愛する。

とくに印象的だったのを一つだけあげるとすれば人の手のひら返しの早さを目の前で味わい、ひどく滑稽に思えた事だな。

こういうのを見るから人間不信になるヤツがいるんだろうと思わさ

れたよ。

常任理事国政府も、日本政府も、マスコミも、世界全てが、束が親しくする人間以外が同時に掌を返したんだから、吐き気がするほど笑ったさ。

そして一言。

『テメエらうぜえんだよ。馴れ馴れしくすんな。束さんに馴れ馴れしくしていいのは束さんが認めた人だけなんだよ。わかつたら失せろ』

ピシリと全員の背筋が固まったのには思わず声を出して噴いちまった。

そのあと俺が変な目で見られた後にまた束がキレたのは容易に想像が出来るだろう。

まあそんなことがありながら、俺は今割と平凡な暮らしを満喫させてもらっているよ。

俺や千冬が束の関係者でありながらそうしていられる理由は極々平凡なもの。

『IS学園が未だに設立されていないから』

これに尽きる。

俺は人類史上初の男の操縦者としてそこに入学させられる予定なのだが、生憎まだ学校がないんだ。

それもそのはず。国の総力をあげても広大な敷地を用意し、馴らし、そこに巨大な建設物を複数建立。更には備品まで揃える。

こんなことが1ヶ月程度で出来れば誰も苦勞はしない。

予定としては来年の春。その時に2年と1年の募集を一斉に掛けるんだとさ。

因みに各国が躍起になってそこに入学をさせようとしているわけで

はないぞ。

ISが世界に発信されて半年程度でまともな知識・指導力を持った教員がそこに揃うと思うか？

そういうことだ。

飽く迄偵察部隊としての派遣くらいでの入学しかなく、金の卵は自国の軍事施設で大事に大事に育てる筈だ。
逆に日本に優秀な人材を送って来る国はバカとしか言いようがない。

この話はもうこの辺でいいか。

これ以上ダラダラ長く話してもだれるだけだからな。
それよりも今は大切なことがあることだし。

「もう2ヶ月か。長かったな」

「東さんは早くみーちゃんに会って頼ずりしないとたつくん分を摸取出来なくて死んじゃうんだよ！東さんの1日の活動に必要なのはたつくん分だからね」

「あんまりくつつくな、暑苦しい」

いつもの事だから慣れたのだが、東が腕に絡まって来るのはやめてほしい。

それにこいつはわざと自分の胸を腕に押し当てて俺の心拍数を測るからうぜえ。

「むう。私だけ涼しい思いをするのは辰巳に悪いからな。私もお前にくつついてやろう！感謝する事だな。ふはははっ！」

いや、そこは束をひきはがしてくれよ。

もうどうにもならないとわかってるからそうしないんだろっけどさ、くつつくのは止せ。

それとその笑い方も怖いし目立つからやめろ。

「そんなに暑い思いしたいなら2人でくつついてるよ……」

「ちーちゃんは照れ隠しであんなこと言ってるんだよ！ホントは束さんとたっくんがラブラブラブリーなのが悔しいんだよ！」

「な、なにを言っておるか馬鹿者！そんなことある筈がないだろう。悔しいと思うわけがない。これくらいコミュニケーションの一つでしかないからな」

コミュニケーションはいいが暑いのは勘弁なんだよ。

ほら、残暑でこいつら2人も薄着だし、汗でじわぁ……ってな？

「じゃあ束さんがたっくんとコミュニケーションを取ってもいいってことだよね！？にゃふふ、束さんのコミュニケーションは激しいよー！？」

「ふ、ふんっ！勝手にしろ！私の方が激しいからな！」

「お前らもう病院についたから離れる。当初の目的を忘れてんじやねエぞ」

激しいコミュニケーションはお断りです。

今でさえめんどくさいのに、これ以上めんどくさくなるとか考えるだけで鬱になりそうだ。

冒頭の話より大切なこと、というのはこの病院で今日退院する妹の

事な。

妹がいるとか聞いてない？言っていないけど仄めかす様な文章はあったら。

因みに一夏と篝ちゃんは学校が終わってすぐに来てるらしいけど

「たつにーモテモテじゃんっ！2人も恋人がいるとかすげえ！」

「バカ。辰巳さんに失礼だろ、一夏」

「いってえ！なにするんだ篝！」

「うるさい、少し黙っている。私は辰巳さんと話をしているんだ。すいません、辰巳さん。一夏がいつも……」

俺はべつになんとも思っていないけどな。

一夏は子供なんだし、年相応でかわいらしいじゃないか。

その子供の発言を真に受けて狂喜乱舞して俺にキスしてこようとす
るヤツとつれし恥ずかし乙女モードに突入して俯いているヤツがい
るけど気にしたら負け。

「いや、篝ちゃんが謝ることじゃないだろ。それになんかあれだな。
篝ちゃんはいつも一夏の世話を焼いて奥さんみたいだな」

「そ、そんなバカなこと……！！！」

おうおう、かわいいねえ。

そんなに顔を真っ赤にして、篝ちゃんはやっぱり一夏のが好き
なんだな。

その一夏はと言つと

「そうだけ、たつにー。なにバカなこと言ってるんだ」

これだもんなあ。

人の事には敏感なくせに自分のことになると鈍感なんて不幸しか呼びこまねえぞ。

「……なにがバカなことなんだ？言ってみろ一夏」

「えっと……。な、なんで箒が怒ってるんだよ」

「お前のその無責任な発言のせいだろうが！」

「うわあっ！」

「喧嘩するほど仲が良いんだな」

一夏はダッシュで逃げたけど、箒ちゃんは俺の言葉を聞いてぴたりと動きを止めてこつちに歩み寄って来たぞ。

仲がいいという言葉に敏感に反応して、かわいらしいねえ。

「た、辰巳さんーい、一夏は私のことなんかなにもわかってないんです……」

「一夏そうだけど箒ちゃんも箒ちゃんだぞ？たまには毅然とせずに甘えてみると一夏も箒ちゃんの違う何かに気付くかもしれないしな」

出来れば俺にも甘えてほしい。だってかわいいんだもん、小学生。

ああ、語弊がありそうな言い方だな。ロリコンではないから注意してくれ。

「ですが、そんなことするのは恥ずかしいんですよ……」

「大丈夫っ！ 篝ちゃんはお姉ちゃんのかわいい妹だから猫耳がとっても似合うと思うよ！ だから今度たつくんに作ってもらえばいいよ！」

「ほ、本当お姉ちゃん!？」

「うん！ お姉ちゃんのうさ耳も似合ってるでしょ？ これもたつくんが作ってくれたんだよ！」

自分の妹に変なこと吹き込んでんじゃねえよ。

見てみたい気もするけど、一夏がそれに反応するとは思えないぞ。

「た、辰巳さん！ 私に猫耳をくださいっ！」

「お、おう。お安い御用だ」

……べつにロリコンケモナーというわけではない。

恋する純情な小学生に頭を下げられて断るとか俺はどれだけ空気が読めないんですか、という話だよ。

「そんな安請け合いをしていいのか？ そもそも一夏が篝の猫耳に反応するかもわからないのに、ぬか喜びをさせるつもりか？」

「そうだったらその猫耳はお前がつけるよ。俺は反応するかもしれんぞっ。」

「べ、別に私はお前のためにわざわざそんなことはしない！ ま、ま

あ頼まれればつけてやらんこともないが……」

いや、流石にそんなことは頼まないから安心しろ。

束のメタリックなうさ耳だって機械弄りながらうとうととしてたら無意識に作っちまってたものを強請られてあげただけだし。

見事にサイズが合ったからコイツにつけてほしいという願望でもあったんだろうかと自分を疑ったさ。

「ちーちゃんがつけないなら束さんがもらってあげる！ たつくんが好きな方をつけてあげるからねっ！」

「やらん！ 猫耳は私のものだ！ 貴様はずっとそのうさ耳をつけている！」

「そんなにほしいなら篝ちゃんと千冬のヤツを両方作ってやるよ。千冬が黒、篝ちゃんが白でいいだろ。そもそも頭のサイズが違うから篝ちゃんのお古は千冬の頭に入らないしな。だが束、お前はうさ耳だ」

まさか千冬が獣耳を自分から欲しがる時が来るとはな。

「にゃふふ」。束さんだけ仲間外れと見せ掛けた特別扱いだね、たつくん！ たつくんの愛は確かに受け取ったよ！」

「（こゝ、これで辰巳にゃんにゃん甘えても違和感がなくなるぞお……！！）しかし変ではないだろうか？ いや、いつもとは違う一面を見せるのは必要だな。辰巳のために猫になって目いっぱい奉仕してやるう！ 断じて自分が甘えたいわけではないからな。そしてあんなことやこんなこと、にゃんにゃんなこともやっていいのか……。いや、やらねばならんだな！ 猫の宿命だ！ 主への忠誠だ、ご主人様

辰巳への！私欲ではない！ふはははっ！」

な、なんか千冬が恐い……。気持ち悪いくらい表情が緩んでる……。！
口からよだれも出てるし、なんかホラーだ。

そんなことで騒いでいると病院の正面玄関の自動ドアが開く音が聞こえる。

それに気付いて目をやると、そこには看護師と一緒に、俺の世界で最も愛でている妹が立っていた。

「お……おに」

「みーちゃんお久しぶり！会いたかったよ！たっくん分を摂取するために頬ずりをさせて！」

ガシッ！ぽいつ

空気を読まないから千冬に頭を掴まれて放り投げられるんだよ、束は。

俺と妹の操おんみの再会あひまなんだからそこは黙っておいてくれると助かる。

「お兄ちゃんっ！」

「悪かったなあ、操。最近は会いに来れなくて。お兄ちゃんは寂しかったけど、操は寂しくなかったか？」

俺の胸に飛び込んでくる操の頭を撫でると俺の心はとっても朗らかになる。

たぶん俺の唯一の癒しだよ。

「ううんっ。寂しかったけど、テレビにお兄ちゃんが出てたから寂

しかなかった！」

「そうか。偉いなあ、操は」

テレビって言うのはIS関連のものだろう。

東の発表について行った時の映像や唯一ISを起動できる男としての特集だったり、俺の過去の記録なり色々あるんだろう。

「えへへへ。もっと撫でて？あと久しぶりのちゅーも」

「いいぞ」

高校1年と小学1年の兄妹だぞ？

これが年子とかなら問題はあるかもしれないが、親と子供の「コミュニケーション」みたいなものだよ。変な意味はない。

因みに『双子なら問題ねエよ。断じて』という電波を受信したがなんのことはわからん。

「……………」

なんか俺と操がキスしているのを篝ちゃんが「ほしって言いたいけど言えない子供」の様な目をしながらみつめてくるんだけど、そういうのに憧れる年頃でもないだろ。

ただ東と千冬もそういう目で見ているが、そっちは無視だ。

「いつかは一夏と出来ると良いな」

「な、なな、なに言ってるんですかつ！私は、そんな……………」

「大丈夫だよ、篝ちゃん。操も頑張るから」

……今の会話の流れからすると『操もいっくんとちゅー出来る様に
頑張るから』という事か……？

「み、操も一夏のことを……！？」

「うんっ！でも今はお兄ちゃんの事が好きだから！」

なんだこれは……。

嬉しい筈なのに全然嬉しくないぞ！？

『今は』ってことは一夏のことが好きになるかも、ということか？

一夏あ……！哀しませることだけはしてくれなよ？

操が一夏のことを好きになったらその時は応援するけど、そんなことしたらお前の命はないと思え。

ゾクゾクッ！

「（な、なんだ今の寒気は！？箒……ではない、もっと恐ろしい何か……）」

幼馴染「猫耳をつけてにゃんにゃん甘えれば幼馴染も私に甘えて……。ん、ん

アンケートってほどでもないんですが

『猫耳メイドの千冬が見たいかあああああああ！』

ということが聞きたいだけです

需要があれば、まあ、そのうち………みたいなの？

私がお姉ちゃんのそばにいと決めた理由（前書き）

シリアス風味にしようかと思っ たんですがほのぼのになってしま
いました

今回の話は難産で短いですが勘弁してください

私がお姉ちゃんそばにいと決めた理由

「……………」

お姉ちゃんの手を握って、無言で母屋を出ていきます。

あの事件が起こる前までなら元氣いっぱい挨拶をして出て行き、背中に両親の声を受けながら出て行っていました。

しかし今は違います。色々あって、私とお姉ちゃんと両親の間に溝が出来たのです。

私がお姉ちゃんを選ばずに両親を選んではいたらお姉ちゃんとの間に溝が出来ていたでしょう。

私にとってはどっちもイヤでしたが、どちらかを選ぶしかなかったのです。

神様はいつも残酷な選択を要求してきます。

それで私はお姉ちゃんを選びました。

「篝ちゃん、いつくよー!?!?」

「うんっ！お姉ちゃん」

お父さんも尊敬できるけど、私はお姉ちゃんの無邪気な笑顔が大好きです。

それでもたぶん、辰巳さんと会うことがなかったら両親の方を選んでいたかもしれせん。

お姉ちゃんには悪いのでこれは内緒ですよ？

辰巳さんはなんていうか、その……わ、私の理想の異性像なんです……。

こんなこと本人には言えませんが、例えば『こんなのが理想なのか？ 篝ちゃん変わってるね』とでも返してくる筈です。

確かに変なところは多いですが、すごくいい人なんですよ？

強くて、優しく、でもたまに厳しくて、大人っぽくて、包容力があつて、ぶれなくて……。

いいところをあげていくと限がありません。

そんな辰巳さんがいてくれたから、私はお姉ちゃんというのを選びました。

あつ、誤解しないでくださいね？ 理想は辰巳さんでも好きなのは、い……一夏ですからっ！

一夏が大きくなったら辰巳さんみたいになってくれることを祈ります。というかそうさせます。

「篝ちゃん顔真つ赤あゝ！もしかしていつくんのこと考えてた？」

「ち、違う！私はそんなこと……」

「図星だね！？にやふふ）。お姉ちゃんに篝ちゃんのことわからないことなんてないんだからっ！」

それに辰巳さんを好きになっちゃうとお姉ちゃんのライバルになっちゃいますし、千冬さんもいるので勝ち目が薄いかなあ、と。

妥協じゃないですよ？一夏もああ見えていいところがあるんです。

「お姉ちゃんは辰巳さんのこと好き？」

「いきなりだねえ、篝ちゃん。お姉ちゃんはたつくんのが大好きだよ！ちーちゃんのこと大好き！もちろん篝ちゃんのこと大好きだからね！？」

「私もお姉ちゃんのこと大好きっ！」

「そうでしょうそうですねー！にゃふふ〜。愛してるぜえええええええー！」

あっ、なんかお姉ちゃんが壊れちゃいましたけど、いつものことなので気にしないでください。

もう小学校の近くで同じ学校の子がお姉ちゃんを変な目で見て、そのあとに私も変な目で見られてるけどそれでいいんです。お姉ちゃんは変ですし。私は普通だと思いますよ？

「あっ、たっくん！おはようのちゅ

」

「黙れボケ。ガキの前でなにやるうとしてやがる」

「ってことは誰も見てなかったらいいってことだね！？それじゃあ今度東さんの部屋にご招待してあげる！続きはその時で！あっ、ちーちゃんもおはようのちゅ

」

「なぜ私にまでやってくるのだ？貴様は死にたいのか？」

こんな変な光景が普通だと思える私はやっぱり普通じゃないかもしれません。

小学校の前でこんなに騒ぐ高校生も珍しいですよね。

「おはよう、篝ちゃ

」

「みーちゃん！たっくん分を！たっくん分を摂取させて！」

「黙ってる変態。操に抱きつくのは結構だが今は黙ってる」

お姉ちゃんはやっぱりいつも変わらないなあ。

あの事件の後日は様子がおかしかったけど、それ以来はいつもの調子に戻っちゃいましたし。

「おはようございます、辰巳さん。えっと……今更なんですけど、ありがとうございますました」

「うん、おはよう。で……ありがとうございますってなにがだ？礼を言われる様なことをしたか？」

辰巳さんは子供が好きらしく、私や一夏、操と話す時はいつも柔らかい表情をしています。

千冬さんとお姉ちゃんと話す時はだるそうな顔ですけど、お姉ちゃん曰く照れ屋さんらしいですよ。

まあお姉ちゃんの都合のいい解釈かもしれませんがね。

「はい。辰巳さんのおかげで今もお姉ちゃんと一緒に居られる様なものなので」

会って初めての日に言われた言葉が、私を突き動かしてくれました。なんて言ったかは教えませんよ？これは私と辰巳さんの2人だけの秘密です。

「それは篝ちゃんが頑張ったからだろ、俺はなにもしてないよ。でも、まあ、どういたしまして。俺も篝ちゃんが束のそばにいてくれて嬉しいよ。ありがとう」

「あ、いえ……そ、その……。そ、それじゃあ行ってきますっ！」

うう〜……。

撫でられるのは嬉しいけど、不意打ち的にやられると恥ずかしいじゃないですか。

だから走って逃げちゃったけど変に思われてないかなあ。

「おい、どうした、箒。変な顔して」

「ふんっ！」

ドガッ！

「ごふっ！な、なにすんだ箒！随分な挨拶じゃねエか！」

「自分の心に聞いてみる！操、行くぞ」

「うん。まあ今のはいっくんが悪いよ。いきなり女の子にあんなこと言えば殴られて当然だよ」

会って早々挨拶もせずになぐられたことをぬかすからいけないんだ。これは一夏の自業自得だ。まったく、これが辰巳さんみたいになるのは……はあ。当分無理だな。

「今日も一日頑張れよー？」

「うんっ！お兄ちゃんも頑張っつてねっ！」

「はい！いつてきますー！」

「たつにー……行ってくる……」

一夏のヤツはまだ痛がっているのか。
軟弱だな。もっと強靱になれ。

カオスの片鱗が垣間……見えたっ！（前書き）

すいません。

諸事情により7話以降を書きかえることにしました。

物語の主軸を変えることはありません。

身勝手な作者ですがこれからもよろしくお願いします。

カオスの片鱗が垣間……見えたっ！

『ワアアアアアア』

『ッ！！』

湧き上がる歓声。

それを聞きながら一人の俺はぼーっと空を眺める。

「（暇潰しのつもりがすごいことになっちまったな……）」

これからいろいろ面倒なことがありそうだ。

とにかく今はこの集まってきた報道陣を適当にあしらって、とにかくホテルに戻ろう。

そう思っただけで競技場から出た矢先、一人の女子が俺を待ちかまえていた。

「すごかったね。すごいっていうかも怖い？人類史上初だよ、1冠なんて。どこにそんな力が入ってるのか不思議だわ」

「……そうだな」

怖い……か。

冗談で言っているつもりなんだろうが、その言葉は俺の胸に深く突き刺さる。

自分で一番それがわかってるからこそ胸が痛むこともあるんだよ。人間の限界を超えた身体能力。中学生にして数多の後人不踏である。う世界新記録の樹立。

これが俺が束や千冬と同じ『異常』と称されるようになる理由。

まあ他にもキチガイ染みた才能があるわけだけど……それは今はどうでもいいか。

なんでかって言われても転生者だからってことで片付くからな。

「あー……ごめんね？そうやって言われるのはイヤだよ。少し気配りが足りなかったかも」

「いつものことだろうが。っていつかいつまで付きまとうんだよ、お前は」

「それはもちろんタツミがこっちに振り向くまでよ」

楽しそうに笑いやがって、少しは罪悪感を感じてくれ。

こっち　今年の開催地がアメリカだったから現在地アメリカに来てコイツと会って以来この女子は妙に俺に付きまとうてる。

よくわからんが「違う匂いがする。あつ、臭いんじゃないわよ？いい匂いがする」らしい。

うん、ホントに意味がわからんな。匂いフェチか？

「残念だったな。俺は明日帰国だ。お前には会うのは明日が最後だろうから、それは有り得ねえよ」

「うふふっ、明日会ってことは見送りに来てほしいのかしら？そうならそうと言えばいいのに」

「……はあ。どうせ来るんだろ？」

「ううん。明日から訓練が更に過激化するみたいだから行けないわ。こうやって会いに来てるとも結構くたくただから少しは労ってくれ

てもいいと思うんだけど」

寂しいなんて思っでない、絶対に。

頑張っているんだろうし、疲れているのにわざわざ会いに来てくれるのは男としては嬉しくないはずがないけど、それを素直に言えばからかわれるから言わない。

どっちかっていうとストーリーキングをされているわけだけでも、それでもな。

「そうか。頑張れよ。じゃあな」

片手をあげて俺はホテルへと歩き出す。

「……あっさりしすぎじゃない？もう会えないかもしれないんだよ？こんなかわいい女の子に」

「自分で自分がかわいいと思ってる女子に興味はねえ」

「連れないなあ、タツミは。こうなったら　えいっ！」

ガシッ

「飛び付いてくんな」

俺の顔面目掛けてダイブして来る女子の顔を掴み、そのまま地面へと転がしてやる。

そいつは赤くなった鼻を押さえて涙目で俺を上目遣いに睨んでくるが、悪いのは確実にそっちだろう。

「いった〜」。もう少し優しくしてくれても良いんじゃない？せ

っかくファーストキスを捧げてあげようと思ったのに」

「誰がもらうか。そしてやらん」

「タツミももしかして初めて？まあ挨拶みたいなものだし、かるく
く」

ガシッ

「だから来るな。挨拶でキスするほど日本人は安くないんだよ」

何度も何度も同じパターンで飛び付いて来ても同じ方法でねじ伏せられるということをこいつは気付かないのか。

「そんなにやりたいならそこら辺の男とでもやってろ」

「ホントにそうしたらちよっとショックでしょ？」

「そんなわけねえだろ」

そんなわけあつてたまるか。

目の前のアメリカ軍所属の美少女がそこら辺の男とキスなんてしたらちよつとどころじゃないっつもの。

「タツミ。少し顔赤くなってるよ？」

「……はあ。じゃあ俺は帰るから。またな、」

変なことを考えると碌な事がないな。

自分のことになるとすぐに顔に出るのは直さないといけない。

まあとにかく、俺はそのアホから逃げる様にその場を立ち去ったわけ、そいつがなにを言っているのかは聞き取れなかった。

「ずるいなあ、タツミは。今までラストネームすら呼んでくれなかったのに、最後に優しい表情でファーストネームを呼んで言い逃げだもん。それに『またな』……か。ふふっ、やっぱりまた逢いたいんじゃない。素直じゃないんだから」

「流石にここまでやって起きないなら仕方ないよね！東さんの熱い熱い目覚めのベーゼでこの眠り姫を起こすしか策はないよ！」

……久し振りに中学時代の夢を見た気がする。

中学時代の数少ない良い思い出　　ってわけでもないが、比較的いい方だろう。

ま、夢は所詮夢だから、今は現実と向き合わないとな。

「朝からグロテスクな映像は御免被りたいのだが」

「グロテスク！？そんなにエグイの!？」

「ああ、一般人なら精神構造が大破するくらいにはエグイ」

そしてエロイ。

束は制服を着ているのだが、IS学園の制服は各自アレンジが自由だからこいつは巫女装束みたいになってる。

なんだかんだで神社の娘なんだよな。

「それじゃあたつくんなら大丈夫だね！」

「勝手に人を人外認定してんじゃねえよ。まあその通りなんだけどさ」

こっちは束のことを普通の人間として見てるのに向こうからはそうじゃないというのは結構辛いぞ。

友達と思っていたら友達じゃなかった、みたいな。

「まあまあ、ちーちゃんに比べたらまだマシだよ」

「確かにな。あいつは鋼鉄すら切り裂く鬼だから」

「ほう、だれが鬼なんだ？言ってみろ」

陰口っていうか、冗談程度の笑いの種として活用しただけだったから本人が出てくるとは微塵も思わなかった。

「げっ、本物!?!」

「ちーちゃん！今回は束さんはなにも言っていないよ！」

「てめえ！逃げるの……か……?」

ピューっという効果音と共に束は颯爽と俺の部屋から退避しようとするから俺が捕まえようとするのだが、そこを鬼に割って入られて取り逃がしちまった。

というか木造と見せ掛けて中に鋼鉄仕込んでいたのにドアが真っ二

つになつてゐるのはどういふ原理だ……？
まさか本当に斬るなんて思いもしていなかつたんだが。

「なにがなんの本物なのか詳しく教えてもらおうか？」

鬼の形相で詰問しないでください。

お前の今の顔を鏡で見せてやりたいくらいには歪んでるぞ。

「簡潔に説明すればお前は人の皮を被つた鬼なのではないかという『議論』がかわされていたんだよ」

「ちーちゃんたつくんに騙されちゃダメだよ！『議論』じゃなくて東さんは一方的に『持論』を押しつけられただけだから！」

なっ！？あいつは見事に俺を見捨てやがった！

こういうときにいつも巻き添えを喰らつてやっていた恩を返せよ。

「だそうだが、どうなんだ？」

ああ、もう俺にはこいつに横一線に一刀両断される未来しか見えな
い。

なんでこんなに凶悪なんだろうか。

東は行く末を見届けることなくどっかに行つちまつたし、誰か助け
に来てくれないなあ。

「えっと……うん。もう斬つてくれ！」

我が人生に一片の悔いなし！

俺は目を瞑つて自分の首が刎ねられるのを待った。

ガツンッ

しかしやってきたのは頭部への鈍い衝撃。
たぶん真剣の峰部分だろう。

「いつてえ……。ホントに叩くヤツがあるかよ」

「斬られるよりマシだとは思わんのか？」

「いや、そうだけど、何もしないで許す寛容さと包容力が見たかった……」

そんなこと千冬に期待するだけ無駄とは思っけど、たまにそういうことがあるからつい期待してしまう。

わずかな可能性でもそれに賭けたくなるのが人間の性だからな。

「確かにすぐにこうやって暴力を振るうのは悪いと思っているが、こちらが間違っていたことがあったか？」

「それなりに」

なにかあったら俺が悪いみたいな風潮がこいつの中で広まっているのは由々しいことだ。

「むっ。それはいつだ？心当たりがないのだが」

「そんなの　　「今じゃない？」　　そう、今とが……って、ん？」

突然割って入ってきた言葉に俺は何の疑問も持たずに頷くが、改め

て考えたらおかしい。

今のは俺が悪いとか束が悪いとか千冬が悪いとかそういう責任がだれにあるかの『おかしい』のではなく、声の主が束ではないのだ。今日がIS学園入学式だから2人以外に知り合いはいないはずなんだが……。

「やつ。久し振りね、タツミ」

丸く収まりそうだったところを笑顔で引っ掻き回しにでも来たんだろうか。

とりあえず今の状況でコイツが現れたことが俺には悪い予感しかないことを伝えておこう。

カオスの片鱗が垣間……見えたっ！（後書き）

感想とかあればよろしくお願いします。
誤字・脱字や指摘等もください。

ここから更にカオスが巻き起こるようです

「やつ。久し振りね、タツミ」

なんでコイツがここにいるんだよ……。

いや、IS学園にアメリカ軍から偵察に出されたという考えなら納得がいくがそういう問題ではない。

というか顔とか全然変わってないし、変わったのなんてスタイルくらいじゃねえか。

まあだからわかったわけだけど。

「おい、辰巳。お前の知り合いか？」

「さあ？俺には日本語を饒舌に喋るアメリカ人なんて知り合いにいないぜ？」

「ほう、アメリカ人か。白人ということだけでどうしてそうわかるのだ？」

「いや、それは……」

しまった。今のは失言だ。

千冬が静かに怒りに燃えているのが伝わってくる。

「アメリカと言えばお前が唯一出場した公式大会の世界陸上が開催された場所だったな。まさかとは思いが私たちは連れて行かずにその人と密会していた、ということはないだろうか？」

髪の毛を逆立ててなにをそんなに怒っているんだい？
そんなに質問文で捲し立てられても答え兼ねる。
それと唯一の公式大会とは言うが選考のために中学陸上の予選でちやんとした記録を残したから公式大会は二回だな。

「ご、誤解だ！おい、ファイルス！」

「あの時みたいに名前前で呼んでほしいな」

「あの時？ほう、なにがあつたか詳しく聞かせてもらおうか」

ダメだ。あの軍人は使い物にならん。

むしろ弊害にしかなりそうにない。そう弊害に

「タツミが泊まったホテルで夜を2人で過ごしたり、レストランで食事したり、空いた日程のときにデートしたりした時かしら？」

人が口を開いて弁解しようとしたときに喋るんじゃねえよ。

しかもその誤解のあるような言い回しは止せ。

「そうか。それは随分とお楽しみだったようだな、辰巳」

「少し落ちついて俺の話を聞け。それは勝手に侵入して来たり、勝手に席に座って奢らされたり、付きまとわれたりしたこの間違いだ。俺は悪くない」

これで俺が怒られるのは理不尽だろう。

連れて行かなかったのはアメリカは日本ほど治安が良くないから千冬たちにもしものことがないようにと思つてのことだと昔にも言つ

た気がするが。

「でもタツミも満更でもなさそうだったじゃない」

「……ふん、まあいい。ところでどちら様だ？まだ名前を聞いていなかったが」

「ナターシャ。ナターシャ・ファイルスよ。これから2年間よろしくね」

「私は織斑千冬だ。同じクラスにならない限りよろしくするつもりはないが、その時はよろしく頼む」

珍しく千冬の考えには賛成だな。

出来るだけ平和に、多くの人と関わらずに静かに学園生活を送りたい。

「へえ、あなたが千冬ね。聞いていた通りの人だわ」

「ほう、辰巳は私のことをどういう風に言っていたのだ？」

あれ、なんかファイルスが楽しそうに笑ってるが、俺はそんなにおかしなことを吹きこんだっけ？

確かに千冬の事は少しだけ話したけど……。
まさか……あれか？

「おいファイルス！それだけは　！」

「ふふつ。『凶暴で凶悪な鬼みたいな殺人級の幼馴染』だって」

ピシリ

なんか空気が固まったな。

千冬も動きを止めてるし、今のうちに逃げよう。

「ふふふふ……。辰巳、どういうことか説明を請いたいのだが？」

「あつ、いや、これは……」

言い返す言葉がないでござる。

今回は確かに俺が悪かった。

だからその不敵な笑みを浮かべて日本刀を構えなおすという行為をやめてくれ。

「最後までい遺言を残させてやっても構わんがどうする？」

「す……。すいませんでしたあ！」

「そうか。では 逝けっ！」

今度こそ俺の人生の幕が閉じるんだな。

思い返せばいろいろなことがあった。

良い思い出も悪い思い出も、今思えば全部最高の思い出だったよ。

さよなら、俺。

「癪だけど、言いたくなかったけど、その続きがあるのよね」

「……まだあるのか？お前はどれだけ私を罵れば気が済むのだ？」

罵ってるわけじゃないんだよ？

本気でそんなこと思ってたら幼馴染でも縁を切ってるって。しかしファイルス。これ以上俺の延命なんてしてくれなくてもいいぞ。

「タツミの名誉のために言わせてもらおうわ。『それでもたまに見せる女の表情も殺人級に面白いから困るんだよ』とも言っていたのよ」

「な、なな、なにを言っているのだ！辰巳！本当にそんなことを言ったのか！？」

……憶えていないとは言えないよな。

確かにこうやって狼狽してる千冬を乙女だなあと思う時はあったが、そんなことをホントに俺が言っただか？

知って間もなかったヤツになんかそんなことを口走るわけがないと思うのだが、知っているということはそういうことなのだろう。

「あー……うん。そうだ」

「そ、そうか……。ま、まあ今回はそれに免じて許してやるとしよう、うん」

千冬は満足そうに頷いてるからよしとしよう。

それよりさっさと着替えないとダメだな。

入学式早々遅れるといけないし、半ば無理やりとはいえ生徒会長に就任したからそれ相応の立ち居振る舞いはしないとイケないだろう。生徒会長としての『ノルマ』だけは達成しておけば誰からも文句は言われないからな。

「おい、ファイルス。俺は本当にあんなこと言ったか？」

「だからあの時みたいにナターシャって呼んでって言うてるじゃない」

「チツ……。で、どうなんだよ」

「名前を呼んでくれるまで教えてあげない」

「そうか。それならいい」

わざわざこのアホの要望通りにして聞くほどのことでもないからな。着替えも完了したし、まだぶつぶつ言いながら頷いてる千冬を正気に戻して学校に行くか。

「ああん！ 久しぶりに会ったんだしもう少し優しくしてくれても罰は当たらないわよ？」

「いつもこんなだったろうが。なにを期待してんだよ、お前は」

「むう。……。まあ、あれは嘘よ。ああでも言わないと千冬は止まらなかつたでしょ？ 感謝はされても冷たくされる理由はないと思うのだけど」

いざとなつたら自分で切り抜けられたから必要はなかつたけど、その気遣いだけは有り難く受け取るよ。

「はあ……。ありがとな。おい、千冬。お前もいつまでもぼーっとしてないで行くぞ」

「わかればいいのよ、わかれば」

そう言っただ俺の腕に擦り寄って来てにこやかに笑うファイルス……
じゃなくてナターシャ。

朝からこういうことをしてくるから握手がハグみたいな思考のアメリカ人はキラいなんだ。

かわいければ何をやっても許されるとも思ってたんのか。

まあ久しぶりに会ったんだし振り払うことはしない。肘の柔らかい感触を味わいたいとかそういう下心はないからな？

「むっ、もうそんな時間か　　っってお前たちはなにをしているのだっ！」

「挨拶みたいなものよ。アメリカじゃ普通よ？タツミがアメリカにいた時もこういうことはやっていたもの」

「ここはアメリカではなく日本だ！そういうことは祖国に帰ってやればいいだろう！それに辰巳、私がいなくてここでそういうことを平然と行っていたのか？私には近付くだけで『暑い』などというくせに、どういう了見だ？」

「いや、こんなことはしてねえよ！しかも俺はそこまでお前を邪険に扱った憶えはない！」

夏はそういうことを言う時はあるが、それも汗をかいている男のそばに女子を置くわけにはいかないという配慮のためだろ。

「柔軟に外の文化を受け入れることも必要なんじゃない？特に日本は多くの面で多様化しているけど、コミュニケーションに限っては希薄だと思うわ」

「まあ、それもそうかもしれんな。コミュニケーションだ。そう、幼馴染と健全な交友関係を築くためのコミュニケーションとして、そうすることも必要だろう」

ふははははっ！といつも通りぞつとしない笑いを声にあげながら、千冬はもう片方の腕にまとわりつく。

なんでこいつは事あるごとに変な見栄を張りたがるんだろう。

「ねえ、千冬っていつもこうなの？」

「まあな」

「なんていうか……大変ね」

千冬に聞こえない様話しているものの、聞こえたらまずいので『ソツとしないだろ？』とは言えない。

ナターシャもそこら辺はさっきの俺と千冬のやり取りを見て察してくれたのだろう。

「なにをコソコソと話しているのだ？さっさと行くぞ」

両手に花　　と言っているのかわからんが、俺たちは千冬に引っぱられるように歩きだした。

しかしこうやって目立つのはイヤなので部屋を出た瞬間にどちらも軽く振り払う。

「もう少しあのままいさせてくれてもよかったんじゃない？」

「そつだぞ辰巳。コミュニケーションは大切だ。出来なければ碌な大人になれんぞ？」

俺より人とかかわるのが苦手な千冬にだけは言われたくない言葉だな。

「うるせえな。俺はやりたいように生きる人間なんだよ」

俺の知る限りじゃ大人なんてまともな人間はいないさ。

そこら辺にいる大人が碌な大人なら逆に俺はなりたくない。

えっと……え？俺は夢でも見ているんだろっか……

「おい、辰巳。私は夢でも見ているのか？」

「いや、俺も今そう思っていたところだ、試しに互いのほっぺを張り合ってみるか」

ギョッ

「「いひゃい……」」

日ごろから痛い思いを我慢している恨みも込めて千冬のほっぺを強めに抓ってみたが、それくらいは予想済みな千冬も俺のほっぺを干切る様に抓って来た。

その結果で夢でないことはわかったのだが、未だに眼前に広がる光景が信じられない。

「ナターシャ……。それじゃあたーちゃんだね！　これからよろしくね、たーちゃん！」

「何かジャンゲルの王者みたいな匂いがする名前だけれど篠ノ之博士が折角つけてくれたあだ名だものね。有り難く受け取るわ。私こそこれからよろしく、篠ノ之博士」

「そんな堅苦しい呼び名はいってば。束ちゃんて良いよー！」

「それじゃあよろしくね、束ちゃん」

目の前で楽しそうに会話を繰り広げる金髪グラマラスとっさ耳グラ

マラス。

ナターシャの方は誰とでも仲良く出来そうな人当たりの良い性格だからわかるのだが、どうして東まで親身に話しているんだ。コイツの身に一体なにが起こった!?

「東、お前は働き過ぎたんだ。熱でもあるんだろう? 今日休め」

「ヒドイよちーちゃん! 東さんは誰とでも仲良くするよ!?!」

「いや、そんなわけねえよ。お前が誰とでも仲良くなんて、そんなわけあるわけない。本気で心配してんだぞ?」

「たつくんまで!?! そもそもたつくんが『自分のことを人として見てくれる目をしてるヤツとは仲良くしろ』って言ったんだよ?」

東さんは旦那さんの言うことは割と素直に受け取るんだから」

ちよつとなにを言っているかわからないです。

確かにこの半年の間にコイツに人を見抜く才能を開花させ、そう教え込んだのは俺だ。

しかしこうも簡単に人間というのは変われるものなのか?

いや、臨機応変、環境適応能力が有り得ないくらい高い東なら不可能ではないと思うが、それでも少し違和感を覚えるというか、不気味である。

「ねえ、タツミ。今東ちゃんがタツミのことを『旦那さん』と言った様な気がするのだけれど」

「それは私も少し引つ掛かったのだが……」

「お前ら少し待て。それについては誤解だから置いておけ。それよ

り束、それは本当に言っているのか？」

この2人に詰問され出したら面倒だ。

旦那さんという単語だけで小一時間説教が出来るくらいに恋には敏感とか、千冬は性格的に似合わないだろ。

顔に似合わなくはないけど。

「あつたりまえだよ！ 束さんはたつくんのお嫁さんだからね！」

「いや、そこじゃねえよ。本当にナターシャと交友関係を築けるのか？」

「たーちゃんなら大丈夫だよ。束さんの目に狂いはないから」

いつもの様なふざけた表情の中にも束の真剣な視線が見てとれて、俺は思わず呆れてしまった。

束の目には狂いはないのだろう。そもそも俺が交友関係を築いている相手だから狂いがあれば俺の信用問題に関わってくる。

そうだとしても、やっぱり異様だと思わされるよ。

束が人間嫌いになったのにはいろいろ理由があるのだが、それは大きく分けると二つ。

自分を傷付けられたくないという防衛本能から来るものと、他人を傷つけたくないという思いやりから来るもの。

前者は昔にながったかよく知らないが、恐らく深い傷を負ってからそうするようになったんだろう。

それと同時にその相手も傷付けたから後者も引き摺ってるっていったところか。

だから束は生半可な覚悟で関わろうとしてくるヤツらを全てスタズタに切り裂いて、切り捨てた。

俺もその被害者の一人なんだがね。

「それにたつくんとちーちゃんが私の心の傷を癒してくれたからこうやってられるんだよ？ それに篝ちゃんからも『いろんな人と仲良くしないとイヤだよ？』って言われちゃってるしね。お姉ちゃんがかわいい妹のおねだりを聞かないわけにはいかないぜ」

その言葉に俺と千冬は思わずポカンと口を開けて惚けてしまう。こいつは割と頻繁に平感謝をしてくるのだが、今みたいに真剣に感謝してきたのは数えられるほどしかない。それを突然言われたのだから、こうなってもなんの問題もない。

「東ちゃんって妹がいるの？ やっぱり東ちゃんに似てかわいいのかしら？」

「ふっふっくん！ 東さんの自慢の妹だからね。東さんよりも断然かわいよ！ 最近なんか『やっぱり神社の娘ならキツネ耳だな』とか言ってたつくくんが作ったキツネ耳を装着して学校に行くくらいかわいよ！」

「それはすごいわね、いろいろと。特にタツミの方が」

うわあ、なんかナターシャからジト目で見られてる。

本当は猫耳にする予定だったんだけど、巫女装束にキツネ耳って言うのは男のロマンが詰まっているだろ？

だからそれで一夏も陥落すると思ってプレゼントしたんだよ。本人もかなり喜んでたしな。

いや、まあ、それはどうでもよくて。

結局。そう、結局東の心の闇を晴らしたのは俺でも千冬でもなく、篝ちゃんなんだ。

昔も、今も、これからもずっと、東の一番の理解者は変わらず篝ち

やんなんだろっ。

俺たちなんか足元にも及ばないくらい、あの二人は強固な絆で結ばれている。

それがなんだか、無性に羨ましく感じてしまっ。

まあ俺も千冬も兄妹と姉弟の関係はかなり強固だからいいんだけどな。

「お、おい、今度は辰巳の様子がおかしいぞ……」

「東さん怖いよ！ にこにこ笑顔で微笑ましく東さんを見つめてくるたつくんが何故か無性に怖いよ！ 嬉しい筈なのにすっごい怖いよ！」

「タツミでもこんな顔するのね……。タツミはどちらかというところ笑とかしかしない生物の類だと思っていたわ……」

言いたい放題言いやがって。

3人とも何故か引き気味だし、東に限っては千冬の陰に隠れるくらいだ。

俺が笑うのはそんなに変なのか？

操に対してとか、篝ちゃんや一夏に対しては割とよく笑う方だと思うのだが。

ああ、よく考えてみればこいつ等に対してはあまり笑いかけないかも。

「俺はこれからこの表情でいる事に決めたわ。そうしたらお前らが無駄な接触とかして来ないし」

「や、やめておけ辰巳。それは私の中で何かがボロボロと崩れていく様な気がする。大事な何かが……」

「そうよ、タツミ。その表情で辛辣な言葉をかけられると今までよ
り心に突き刺さる気がするわ」

「たつくん、今まで大変だったんだね。いいんだよ、もう無理をし
なくても。東さんが胸を貸してあげるから」

「「順応した!?!」」

「チツ……」

「舌打ちされたあ!?!」

一番厄介な束を突き離せないならこんな気持ちの悪い表情をずっと
している意味なんかねえよ。

それに残りの2人も1日くらいで「これはこれで良いかもしれない」
という順応速度を持っていそうだ。

だから俺はいつも通りの気だるそうな表情に戻し、いつも通りに3
人を睨む。

やっぱこれが落ちつくな。

「やはりさつきまでの辰巳の方が良かったような気が……」

「そうね。顔だけでも優しそうな雰囲気が出てる分だけマシだった
のかもしれない」

お前ら2人はどっちなんだよ。

そういう自分勝手な考えはさっさと捨てといた方が身のためだぞ。
ただ自分を守るときは自分勝手な方が有利ではあるけどな。

それでも千冬もナターシャも、立场上そんな身勝手は許されないだ

ろう。

「東さんはたつくんならどんなたつくんでもいいよ！ だって私が好きなのはたつくんの全部だから、どんな部分も愛してるよ！ そうじゃないとお嫁さんは務まらないもんね！」

「だからお前と結婚する気なんかないと半年前から言ってるだろうが……」

本気でお嫁さんを務めたいならまず静かにできるように努めてほしい。

まあその気持ちは嬉しい限りではあるんだが。

「んん！ 東と結ばれる気がないということはだな。その……あれか？ ま、まだ私は心の準備が出来ていないのだが……。お、お前がそう言うのなら……ゴニョゴニョ……」

「だ、大胆ねタツミ……。こんなところでそういうのは、いくら私でも恥ずかしいものがあるというか……。ああ、でも嬉しくないわけじゃないのよ！？ ただ、その……ゴニョゴニョ……」

なにを顔を紅くして喋ってたんだ、この2人は。

どういつ勘違いをしたらそう言う風になれるのか、どういつ頭をしたらそんな勘違いが出来るのか、少し解剖してみたいと思った俺は悪くない。

まあ、何故かわからんが3人目が加わったわけだが、変わらず誰とも結婚する気はないから安心してほしい。

えっと……え？俺は夢でも見ているんだろうか……（後書き）

フレンドリー束を書いてみたら割とすんなり話が作れた。

ナターシャとぶつかるとどうしても話がぎこちなくなるからこの際半年間の間にフレンドリーに改造したという設定で行こう！ということとで再発進したら以外といけました。

反響はどうかわかりませんが、ご意見があれば感想までお越しを。

かわいかった昔とは全然違うけど、今のいろいろな意味で凶悪な幼馴染もいいが話作りが面倒だったので臨海学校まで時間を飛ばしました。
2年なのに臨海学校と言うのはまたおいおい説明していきます。

かわいかった昔とは全然違うけど、今のいろいろな意味で凶悪な幼馴染もいいか

「待たせたか？」

「いや、べつに。それよりさっさと行くこうぜ」

「むっ、そうだな」

軽く挨拶を済ませて俺と千冬は並んで歩きだす。

昨日千冬に誘われて2人で臨海学校に備えて水着を買いに行こうという事になったのだが、やっぱり千冬いると妙に目立つな。

私服もかわいいし、性格はどうであれ 嫌いではないが
顔もスタイルもいい。

周囲の男子の視線を集めるから一緒にいる俺の華の無さに嫌気がさしてくるわ。

「その……なんだ。今日はありがとう」

「それは今言うことか？ 幼馴染の頼みなんだから、これくらいならいつでも付き合っただけよ」

「そうかそうか。うん、そうなのか。私の頼みなら何でも聞いてくれるのだな」

おい待て。

俺はそんなことは一言も言ってないぞ？

なにをどう解釈したらそこまで行きつけるのか俺には理解出来ない

んだが。

「まあいいけどさ。それより今日は人が多いな」

「そうだな。週末だから仕方ないと言えば仕方なのだが、もう少し空いていた方がゆっくり出来るからよかった」

「それに逸れるかもしれないし、手を引いてやるうか？」

「わ、私は気にしないが、そうした方がいいというのならしてやらんこともないぞ？」

いつも思うが、なんでコイツはいつも上から目線なんだろう。

そろそろ慣れて来たから良いものの、子供の頃みたいにべったりしてくれればいいのに。

昔は 今の十分だとは思ってた。 今とは段違いでかわいかった。

俺が子供好きという鼻窟目をなしにしても、これほど自慢の出来る幼馴染はいないだろうと思ったくらいだ。

それが今はこの凶悪な女帝だよ。いやあ、やっぱり時は人間を変えらんだね。

「今失礼なことを考えていただろう？」

「いや、なんていうか、今のお前も昔みたいに俺の後ろを『たっちやんたっちゃん』って言いながら追い掛けてくるかわいげがあればいいな、と思っただけ」

「なっ!？」 お、お前はいつまでそんなことを憶えているつもりだ
「!」

「そんなに顔を紅くして怒ることか？ そんなの一生憶えてるさ。幼馴染との大事な思い出だからな。忘れる方がおかしいだろ」

綺麗な思い出は綺麗なままずっと残しておきたいと思うのは普通の考え方だよな？

人間は幸せな記憶より不幸な記憶が脳に残り易いとは言うが、その人が忘れたくない甘い思い出ってというのはいつまでも憶えてるものだ。

その逆の忘れたくても忘れられない苦い思い出もいつまでも憶えているんだから、人間の脳はよくできている。

千冬も俺も、その『苦い思い出』を反面教師にした結果が、今のブラコンとシスコンなんだから、ある種はその思い出に感謝しなければならぬと思う。

ただその思い出を植え付けた張本人は、どうやったって許すことなんて出来ないけど。

「お、お前はそういうことを平気で言うな……。恥ずかしいだろう……」

「それじゃあお前は忘れるのか？」

「そんなわけないだろう！ お前との思い出で忘れたものなど一つも っつ……」

嬉しいこと言ってくれるじゃないか。

それを聞きながらニヤニヤしているのがわかったのか、千冬はいうのをやめて恥ずかしそうにしぼんでいく。

こういうところは昔から変わらないな。

『苦い思い出』を植え付けられる前の千冬と全く同じだ。

今の様に強い責任感などなく、ずっと俺を頼ってばかりの子供だった千冬。

俺と二人きりの時くらいずっとその千冬でいてほしいのだが、それは無理な相談か。

何といつても今のコイツは一夏の唯一の家族なんだから。

「ほら、いつまでも萎んでないで行くぞ。お前が誘って来たんだろ
うが」

歩みまで止める千冬の手をぐっと引いて、俺は無理矢理千冬を歩かせる。

なんか本当に子供の頃を思い出すみたいだ。

「……辰巳はいつだってそうだ。私の手を引いてくれて、本当の兄の様に面倒を見てくれて、こっちの気持ちには気付かずにとんどん自分の世界に引き込んで……」

「なんだって？ 悪い、周りがうるさくて聞こえない」

「な、なんでもない！ さっさと歩け馬鹿者！」

あーあ、昔を思い出して感傷に浸っていた俺がバカみたいじゃないか。

『歩けないからたっちゃんがおんぶして』とか今の千冬が言ったら俺はたぶん爆笑するだろうな。

あまりにも似合わなさ過ぎる。

「お前は馬鹿者と罵られてニヤけるのか……？」

「それは勘違いだつて。俺にそんな趣味はないことくらい言わなく

てもわかってるだろ」

「その割には本気でやれば私など真剣を持っていても負けるというのに對抗して来ないではないか」

「そりゃあ面倒だからだ。出来ればお前には俺を斬ろうとする愛情^く表現は直してほしいぜ」

失言すればすぐに真剣の刃が向かってくるとか笑いごとじゃないかな。

やられている方はたまったもんじゃねえよ。

「悪いとは思っているが、辰巳なら大丈夫だという考えが頭を離れないのだから仕方ないだろう?」

「その無駄な信頼はなんだよ。そんな信頼する前に俺の失言を許す寛大な心を持ってくれ。幼馴染として」

大丈夫だからこそ今まで全てくぐりぬけて来ていたわけだが、危険な目に合っているのは事実だからな。

そもそも生身の人に対して真剣を振り回すということ自体が異端だろ。

「失言する方も悪いだろう。だいたい辰巳はわかっただけで言うてるのかと思う時があるから、無性に殴りたくなる」

なにその殺人衝動怖い。

俺は人を殴りたくなるときなんか滅多にないからよくわからんな。

「……そ、それに幼馴染としてではなく、こ、恋人として頼まれた

「何でも言うつことは聞くし、むやみやたらに刀を振りまわすこともしないのだが……」

「だから聞こえる声で喋ってくれないと困るって言うてるだろ」

「う、うるさい！ そんなに顔を近付けな！ 暑いだろう！」

「いてえっ。掌で人の顔を押し返すな。なんだよ、これくらいべつにいいじゃねえか」

顔を真っ赤にして怒るほどのことでもないだろ。

それにしても掌からいい匂いがするとか女の身体構造は不思議だな。

「ダメだ。お前は近付くところ構わず発情して顔を赤くするからな。……そういうのは部屋で二人きりのときとかにすればいいものを、そう言う時に限ってこいつはいつも適当なんだ。焦らしている様にしか感じられない……」

「発情って……そんなに安くないって。ああ、いや、あれだぞ？ べつにお前が女として魅力的でないということ saying っているわけではないからな？ 俺の気の持ちようの問題だからな？ 変な誤解はするなよ？」

「そ、それはつまり私はお前から見て女として魅力的だということか……？」

なんでそんな不安そうな顔をして上目遣いをしてくるんですかね！？
たまたま 1年周期くらいの僅かな回数だけど ころやつて
ある種凶悪になる幼馴染が最高に恐ろしい。

保護者としてというか、俺の我が儘ではあるんだけど、こつこつ表^か

情は俺以外にして欲しくない。

たかが幼馴染一人への独占欲が強いとか我ながら変な性癖持つてるよ。

いや、幼馴染だけじゃなくて天災とかアメリカの軍人とかもその枠に括られる。

俺は1人なのに3人への独占欲が強いというのはおかしい話だ。

「えっと……うん。そういうことになる……のか？」

「はつきりしてくれ。言われないとわからないんだ。不安なんだ……」

「ああ、もう！ 恥ずかしいんだって！ お前は十二分に魅力的だよ！ 言っただぞ！？ これでいいのか！？」

街中で思い切り叫んだ俺バカ過ぎて笑えない。

ざわざわと周囲の人の視線が俺たち2人に集まり、ある程度歳を取ったおじさんやおばさんがニヤニヤしながらコソコソ話をしているのが確認できる。

「こ、こんなところで叫ぶヤツがあるか！ 馬鹿者！ ほら、さっさと行くぞー！」

「なんでお前まで顔を赤くしてんだよ」

「あんなことを言われれば恥ずかしいに決まっているだろう！ それくらいわかれ！ 幼馴染として！」

「はいはい、そうかよ」

そんなに怒鳴り付けなくてもわかりますよ。

「少しだけ、だがな……。う、嬉しかったぞ……。？　ありがとう……」

「お、おう、そうか。そりゃあよかった」

俺の手を引きながら俯いて礼を言う千冬に、俺は思わずほのぼのとしてしまう。

少しだけ、か。俺には千冬をなかなか喜ばせることは出来ないようだ。

昔とは立場が違っけど、こうやって大人になった千冬に手を引かれるのも、割と良いかもな。

確かに俺が悪い部分は多いと思うのだが、これはいろいろと理不尽だろ

「どうしてタツミと千冬はあんなにいい雰囲気なのかしら。認めたくないけど傍から見れば恋人にしか見えないわ」

「なにをおいてもこの束さんを見るべきなのにどうしてたつくんはちーちゃんと2人きりのときはあんなに楽しそうなのかな。たつくんはなにもわかつちやいないよ」

二人で談笑をしながらモールの中を歩く二人にこの2人は嫌気がさしていた。

因みに2人とも簡易ステルスをしているために、向こう側から気付かれることはまずない。

それにしてもお似合いのカップルだ。男女問わず通りすぎる人の目を引き、すれ違う人を全て振り替えさせるほどに理想のカップル像を演じている。

いくら欲望に忠実でKYなうさ耳と、タツミに会いたいがために学園行きを志願した軍人でも、あの中に飛び込むなんてことは到底出来ない。

束の場合は親友の恋を応援したいという気持ちもあるわけで、いろいろと複雑なモノである。

「ねえたーちゃん。ハーレムってどう思う？ この間見ていた漫画にそういうのがあったんだけど」

「ハーレムってあの男が何人も女子を侍らせているヤツよね？ あの女子の気持ちはいまいち理解出来ないのだけれど、それがどうか

したのかしら」

「それならたーちゃん。ちーちゃんに勝てると思う？」

「うっ、それは……」

言葉が詰まり、勝てると思言できない自分が悔しい。

幼馴染という大きなアドバンテージもあり、ナターシャとの差は確実に大きく開いているだろう。

それ以外にも辰巳は千冬を特別視し、一目おいている節がある。

この状況で勝てるという方がおかしい。それは東も同じだ。

「私は勝ちたい。でも誰かが勝つたら負けた人が不幸になるのは必須だよ。知らない物が不幸になるのは勝手だけど、たっくんの友達とかが不幸になるとたっくんも不幸になるから避けたいんだよ」

「まさか東ちゃん……。いや、でも正気？ 私は出来れば私だけを愛してほしいと思うのだけれど」

事実、ナターシャの言っていることは至極真つ当である。

女性であるなら、男性であるなら、普通の人間であるなら、特別な一人としての異性として見られたいと思つて当然だ。

しかしナターシャの目の前にいるのは『普通の人間』ではないし、好意を寄せられる人物も『普通の人間』ではない。

それぞれがある種で異常性を持つ人間だから、普通は考えないその考えに至つてもなんら不思議ではないのだ。

「私もたっくんとちーちゃんに会つてからずっと悩んでたんだけどね。私はもうお嫁さんだから後から誰が入つて来てもなんの問題はないよ」

「それは束ちゃんが一人で言っていることでタツミは何一つ肯定していないわよ？」

「むっ、束さんがそう言っているんだからそうなんだよ！ たっくんはああ見えて実は束さんを一番愛しているからね！」

「それは聞き捨てならないわね。私だってタツミに愛されている自信があるもの」

どちらも確証はない不毛な争いなのだけれど。

「というか束ちゃんよりタツミのことが好きだということに自信があるわ」

「言ったねたーちゃん。私がたっくんを思う気持ちは宇宙の大きさでも表現できないくらいに大きなものなんだよ！」

「そう。それより早く追い掛けない？」

「そうだね」

なんとなく、自分から嫉けたのだが言い争うことがバカバカしく感じました。

そもそも言論でナターシャが束に敵う筈がないというのもあるが、デートを尾行しているというのにそのデート中の意中の男子のことで争うことが惨めだと感じたのである。

自分がどれだけ好きだと主張しようが、デートをしているのは違う女子という曲げられない事実があり、それに直面するとかなり凹む。

「「はあ……」」

二人は大きなため息をつきながら、ばれないように尾行を再開した。……大声で叫んでステルスによる気配遮断が無効化されたことを忘れて。

「わざわざ悪いな、俺の水着なんか選んでもらって」

千冬もやっぱり女子で、幼馴染なだけのことはある。

俺の好みで且つ俺に似合う水着を選んでくれたのだからコイツと来てよかったよ。

ナターシャと来ても同じ風になるんだろうが、束はおかしいからな。

「気にするな。それに一緒に水着を買いに来たのだ。それくらいはさせる」

「そうかい。それならお前のは俺が選んでやるよ」

「……よし、計画通りの展開だ……」

「ん？ どうかしたか？」

小さい声で喋られると聞き取れないと何度言えばわかってくれるんだろうか。

「ああ、いや、なんでもない。それより行くぞ」

「あつ、おい！ 置いて行くなつて」

いつものことではあるのだが、振り回されるのはかなり疲れる。

俺としては振り回されず振り回さずの関係がいいのだが、コイツに言つたところで成立する筈がないか。

それから先に行つた千冬の後を追うと、黒のレースとリボンのついたビキニタイプの水着を持って少しだけ頬を赤くしている千冬を見つけた。

「し、試着した方が良いか？ お前は……その、私の水着姿が見た
いか？」

「いや、着たくないならいいんだけど」

「着替えるから入れ！」

「どおっ!?!」

いきなり首根っこを掴んで試着室に引きずり込むとはどういつ了見
だ？

それ以前になんで俺まで入ってるんだよ。

着替えるならそうしてもらえばいいのだが、俺が入る必要が見当た
らない。

「そこは見たいと言うのが常識だろう、馬鹿者」

「お前が見せたくないものをわざわざ見せてくれなんて言わねえよ」

それに海で見た方が感動できるかなあ、とか変なことを考えてしま

ったわけだ。

我ながら女々しいことを考える様になつたな。

「見せたくないとは言っていないだろう。私はお前が見たいか見たくないのか聞いているのだ」

「あー……そうだったのか。悪いな。見せてくれるなら見たいよ」

「そうか。それなら今から着替えよう」

「それじゃあ俺は外で」

「ここにいろと言っているだろう」

どうして肩を掴んで離してくれないのでしょうか？

「……俺は哀しいぞ幼馴染。お前には男を試着室に連れ込んで着替えるなんていう変態趣味は持ってほしくなかった」

「私にそんな趣味はない！ ただ……あれだ。今はここにいてくれ……！」

「はあ？ 意味がわからないんだが」

「わからなくてもいいからいろと言っている！ いいから黙って向こうを向いてろ！」

「そんなに怒鳴ることでもないだろうに……」

試着室に連れ込まれたから生着替えとか披露してくれるんだろうか、

とか期待した俺が馬鹿だった。

そもそも千冬がそんな破廉恥な行動するわけねえよ。

普段だったらこんな密室に二人きりだと『不埒だ!』とか言う様なヤツなのに。

そう考えると理不尽だよな。俺が何か悪いことをしたのかよ。

というか近くにいるだけで不埒って、俺はもしかして嫌われてるのか?

「なあ千冬」

「なななな、なんだ? い、今こっちを向いたら確実にお前を殺す自信があるぞ?」

「その無意味な自信はどうでもいいんだが、お前は俺のことが嫌いなのか?」

「……どうしてそうなるのだ。昔から私はお前一筋だと言うのに……」

なんていてるか聞こえないけど………続けても大丈夫だよな? なんとなく怒気が感じられるが気のせいだよな?

「近付けば不埒だと言うし、人のことはすぐに斬ろうとするし、割とすぐ暴力だし、これで好かれていたと言う方が変だと思っただけだ」

「……だからそれは愛情表現の裏返しで………ああ、もう! 鬱陶しい! どうしてそう女々しいのだ!」

「はあ!? 俺のどこが女々しい」

流石にこの理不尽な言い様にはいたたまれず、俺は思わず振り向いてしまった。

いろいろ思うことはあるが、コイツはなんていう格好で俺を詰ってたんだよ……。

「み、見るなああああ!!」

「ま、待て! これは事故だ!」

「……なんだと?」

「そ、そんなに睨むなって……。事故だから。な?」

相手の格好とか気にせず説得しようとしてる俺って、傍から見たらすげえ変態なんじゃねえか?

まあ、今はそんなことを気にしていたら間違いなく殺られるから気にしてられないのだが。

「私は別に見られたことはイヤではなかった……。だが、それを事故だと、私が異性に初めて見せる裸体を事故で済ますことは許さん……!!」

見られたことはいいのか!?

コイツ、なんて屈強な女戦士なんだ……!!

「じ、じゃあ故意だったらよかつたのか?」

「い、いざそう言われると言い辛いのだが……そうだ」

怒りたいのか恥ずかしがりたいたのかどっちかにしてくれよ。

「故意つて……それじゃあ俺がただの変態じゃねえか」

「この状況で何を言っている。手で隠しているだけの女子を目の前に平然と喋られるヤツが変態ではないと言えるのか？」

「この状況で背を向ければ俺の死は必至だろうが」

それに俺は見たいときは見たいと言っし、許可を貰わなければ基本的に行動は起こさないタイプなんだ。

もちろんそれに見合った報酬も出すし、そこら辺はきっちりとするぞ。

「まあ……なんだ。等価交換として……見るか？」

「死ね！」

「ぐほあっ！」

うん、今のは俺が悪かったよ。

女子の体と男子の体が等価なわけがないんだ。

俺鳩尾を殴られ、そのまま意識を黒い闇に放り投げた。

やけに気持ちの良い枕だと思ったたら膝枕だったのね（前書き）

ツン素直？な千冬になってたけど気にしたら負け。

今回は始終膝枕状態で話が進みますのでご注意ください。

やけに気持ちの良い枕だと思ったら膝枕だったのね

誰だか知らんが俺の頭を優しく撫でている。

思い当たる人物は千冬しかいないのだが、さっきまでの変態だったヤツにそんなことをするほどあいつは狂ってないから違うと思う。かと言って他に心当たりがあるかと言われればノーとしか答えられないけど。

そして俺は横になっているのだが、その頭の下にある枕がすげえ感触と寝心地が良くて、ずっとこうしていたいとさえ思われる。

今日はこの枕も買って帰って愛用の枕にしよう。

「……………」

一瞬だけ、一瞬だけパツと目を開いてみたんだ。

そしたら気を失う直前まで裸体でキレていた鬼の優しい顔がそこにあったから、俺は思わず瞬時に目を閉じたよ。

普通そうするだろ？ だってあの千冬が変態オレの頭を撫でながら優しい表情で俺の顔を覗き込んでくるんだぞ？

無駄に心拍数が上昇して緊張するじゃねえか。

しかも滅茶苦茶恥ずかしい。

「お、起きていたのか？」

「あ、いや、今起きたっていうか……………お前は何してんだ？」

「べつに変な意味はないぞ？ さっきは私も悪かったというか、あれは確かに事故だったというか……………そう！ 謝罪の意味を込めて撫

でているのだ！」

謝ってくれるのは嬉しいのだが、ここでまた俺が肯定すると不機嫌になるんだろうな。

嘘をつくのは好きじゃないが、本当のことを言って人を傷付けるのも好きじゃない。

俺が悪役を演じてそれで千冬が幸せなら俺は何も文句はねえよ。

「事故じゃねえよ。見たくて見た、それだけだ」

「お、お前は本当に見たかったのか！？ どれだけ不埒な行為をすれば気が済むのだ……！」

さっきはお前がそう言ってくれて言ったくせに何言っでやがる。というか、どっちにしる機嫌が悪くなるなら本当のことを言っで変態にならないだけの方がマシだったんじゃないか。

「だからごめんって言ってるだろ？ 見たのは悪かったと思ってるよ。それよりお前、あんまり変なこと言っくんじゃねえぞ？」

「私は変なことなど言った覚えはないが？」

「そりゃあ重症だ。男に裸を見せるのはイヤじゃないって、どう考えても変なことだろ。男子に見られたら嫌がれよ」

「あ、あれはそう言う意味ではない！ はあ……。どうして貴様はそこまで鈍感なのだ？ 普通あの状況であんなことを言えば普通は気付くと思うのだが」

恥ずかしがりながら呆れられたが、俺は変なことでも言っただか？

ただ千冬の変態的な発言に注意しただけなんだが、どうしてそれが鈍感に繋がるんだ。

「だから男子に故意に裸を見られるのが好きってことだろ？」

「そんなわけあるはずがないだろう！ お前の様な変態と一緒にするな！」

「耳元でデカイ声出すなって。ただでさえ頭痛がするのに、より頭が痛くなるだろうが」

「それはすまない……ではなくてだな！ 私にそんな趣味はない！」

「わかった！ わかったから落ちつけて！ な？」

顔の位置は千冬が上で俺が下だから、コイツが叫ぶとたまに唾が飛んでくるんだよ。

それはいろいろとまずいことがあるから避けたい。

「それに俺は女子に裸を見られて喜ぶような変態じゃねえ」

「さっき私に持ち掛けたではないか」

「そりゃあ見たお返しみたいなものだからな。それに千冬だからってというのが大きいよ」

見たら見せるという考えは些かおかしい様な気もするけど。

「そ、それはつまり」

「おう、幼馴染だし、昔一緒に風呂に入ったこともあるから大丈夫かな、って」

「期待した私が馬鹿だった……」

勝手に期待して落ち込まれても俺にはどうしようもないのだが。そもそも俺に何かを期待することが間違ってるんだよ。

頼りにされてもいいが、期待はしないでほしいというのが本音。

「それより千冬、この枕って何円だ？」

「私が好きでやっている事だから金を取る気はない。というか、前は私がこれくらいで金を取るように見えるのか？」

枕の値段を訊ねただけなのに不機嫌になる必要性はないだろ。俺が新しい枕を買うことがどれだけ気に入らないんだ。

「言ってる意味がわからんが……無料ただなのか？」

「そう言っているだろう。馬鹿か？」

どんな枕かすら確認もしてないのに値段を知らないだけで馬鹿扱いは理不尽だろう。

「じゃあもらって帰ってもいいのか？ 出来れば毎日この枕で寝たいんだが」

「も、もらうだと！？ それに毎日なんて……。お、お前が望むならやってみらんこともないが、それだと私の睡眠時間が無くなるだろうっ。」

さつきからコイツの言っている事がいまいち理解出来んな。
俺がこの枕を買うことで千冬の睡眠時間が削られるわけがないのに。
まあ今日は様子がおかしいし、戯言程度に聞き流して、俺はこの枕
の感触を手でも味わわせてもらおうかね。

「ひゃう!? お、お前はどこを撫でているのだ……!!」

千冬の顔が赤いが気にしたら負けだ。

それよりも枕……が、妙に温かく、人の肌のようにすべすべなのは気
のせいかな?

あっ、もしかして俺、またミスったんじゃないの?

「すまん！ 今の今までお前の膝の上に寝かされるとは思っても見
てなかった！ それと今のは」

事故だと、そう言おうと思ったがさきほどの映像が脳裏をよぎって
口に出ない。

だれだってあんな痛い思いをするのは二度とごめんだろ。

「今のはなんだ？」

「……太ももを触りたくて触った」

「おま……!! こ、こんなところでそんな破廉恥な発言をするな
！」

拳が飛んでくる！

逃げればいいのだが、奈何せん寝心地が良くてそこから動くことが
出来ず、俺は目を瞑って衝撃に備えた。

だが、衝撃はいつまで経ってもやって来ない。

「……そんなに触りたいなら二人きりのときに言ってくればいくらでも触らせてやるのだが……」

「な、殴らねえのか？」

ぶつぶつと小言を言われていると殴られるより恐ろしいのだが。いつそのことひと思いにやってほしいぜ。

「……逆に問うが、殴りたいのか？」

「いや、殴られないならそれがベストだ。……あっ、それともう一つ質問して良いか？」

「なんだ？ ひ、膝枕くらいならお前が泣いて頼めばいつでもやってやるぞ？」

「ホントか？ 俺が寝ている間に食い殺そうとか考えてないよな？」

「殴るぞ」

今まで叩き起こされたりしてたからそれはないと思うのだが、何故だか最近は食われるんじゃないかと不安になって来たんだよ。性的な意味ではなく、栄養の摂取として。

……と、そんなこと考えてる場合じゃねえか。

「まあまあ、その握った拳を開けよ。なんで千冬が俺を更衣室に連れ込んだか聞きたいんだけど」

「あの二人が尾行してきているのはお前も気付いているだろう？」

「ああ、それはな。街中でデカイ声で騒いでたからな」

簡易ステルス　この場合は認識阻害という方がいい　人は人に気付かれていない限りは気配遮断が可能で、気付かれた時点で何の意味もなさなくなるから、なにか騒いでいた2人を見つけてからはずっと気配を感じていた。

まあ、そうじゃなくても『何もない空間がついて来る』という違和感を感じていたからそれがなくても気付いていたが。

「その……あれだ。どうせ私が試着している間にあいつらが出てきたらお前はあいつらの相手をするのだろうか？」

「しねえけど」

「嘘をつけ！　どうせするに決まっている！」

怒りながら決めつけるって、俺はどれだけ信頼されてないんだ。

「今日は2人で出掛けてんだろ？　そのときにお前以外の誰かを見るほど俺も非常識じゃねえよ」

「そ、そうか……」

「なに？　もしかしてそんな理由で俺を連れ込んだわけか？　こっちの気持ちも考えてくれよ。あんな密室でお前が着替え始めたら気が気じゃねえっていうのに。そもそもそんなくだらない心配するな。もう少し信じてくれてもいいと思うわ」

なんかいろいろと考えていた自分が馬鹿らしくなってきた。
自分が美人スタイルが良いっていうことをもつと自覚してくれないと困るんだよ。

「くだらないだと……？ お前にとつてくだらない理由でも私にとつては大事なことなんだ！ それをお前は」

「そうじゃねえって。もつと信用してくれって意味なんだよ。それに今はお前以外見ないって言ってんじゃねえか。だから……まあ、あれだよ。お前も今はあいつらのことなんか気にしないで俺だけを見るよ……！」

我ながらよくこんな恥ずかしい台詞を言えたと思う。

でも今のコイツはこうでも言わないと落ちついてくれないだろ。仕方なかったんだよ。な？ わかるだろ？

死ぬのと恥ずかしいのだったら断然後者の方がマシだという人間らしい考え方をしたただけだからな。

「なつ……！？ そ、そういうことならもつと早く言えばいいのだ！」

「お、おう。すまん」

「……それはつまり……す、好きということなのか……？」

「どうした？ 顔赤いぞ？」

それになんか少しニヤけているから悪寒がする。

「んん！ いや、なんでもない。それよりもう一度着るから見てく

れるか？」

「いいけど……」

なんというか、もう少しだけこうしていたい。

「けど、なんだ？」

「いや、なんでもねえ。今度は外で待ってるからさっさと着替えるよ」

そんなことは口が裂けても言えないか。

コイツの機嫌は直ったんだし、わざわざこれ以上恥をかく必要はない。

「うむ。承知した。ちゃんと待っている？ いいな？」

「しつこい。さっさと行けって」

「むう……。やはり私と一緒に入れ」

「お前なあ……。少しは信用しろって。終いには泣くぞ？」

ほっぺたを膨らませる千冬に少しときめいた俺は悪くない。

というか、人が快楽を振り払って体を起こしてやったっていうのに、いつまでもこんなことで時間を使うなよ。

「それならば私が泣いてもいいのか？」

「なんでそうなるんだよ。俺があいつらと話したところで泣くほど」

のこともないと思うが」

リアル鬼の目にも涙ってやつか？

それはそれで見てみたい気もするが、千冬の涙を見たいとは思えないな。

「……今の私にとってはそれがどれだけ大切か。で、でで、デート中なのだから他の女子と話しているのを見たくないと思って当然だろうー!」

「ああ、もう、わかったから。絶対に話さないから。誓うよ誓う。心に誓いました。はい、これでいいんだろ？」

「少々投げやりではないのか？」

「どんだけ我が儘なんだよ……」。

まさか千冬の口からデートなんて言葉が出るとは思わなかったが、ここまで渋る千冬も珍しいな。

「このやり取りは俺が試着室に入るまでやるのか？」

「じ、自分から入るなど不埒だ!」

今の千冬の言葉でこの問答には終わりがないと確信したね。

「はあ……。顔を赤くしてないでとにかく行け! じゃねえと帰るぞ?」

「赤くしてなどいない! 恥ずかしくなんてないからな!？」

「恥ずかしがれって言ってるんだ！」

「わあっ！？ お、押すな！」

強引に試着室に押し込んで悪いと思うが、こうでもしないと一人じや入らないだろ。

露出狂なのか、はたまた寂しがりなのか。

前者だったら間違いなく縁を切らせてもらっぜ。

後者なら千冬らしくない、かわいらしい一面があるじゃないかと思っくらいだ。

とにかく、俺は近くのベンチに座って携帯を弄りながら千冬の更衣を待つことにした。

誰という時間も、等しく大切にしたりたいんだよ、俺は

「この束さんに入る隙を与えないなんて……！！ 眩しい！ あのピンク色のオーラが眩しすぎるよーちゃん！」

「ええ、ええ。そうね。もう見てられないわ。見てることがちがニヤけそうなもの。まるでおとぎ話でも見ているかのようだよ」

この2人が水着売り場に到着したのは千冬が気を失っている辰巳を試着室からずりずりと引き摺りだしているときだった。

そのときは千冬のあまりの剣幕に近付くことが出来ず、現在は辰巳が千冬に膝枕をしてもらいながら2人で楽しく談笑しているので迂闊には近付けない。

辰巳が気を失っているときに近寄ろうと思ったが、結局辰巳が起きてないのでは意味がないのと、辰巳の頭を撫でる千冬の顔があまりにも優しいものだったので思わず見とれてしまい近寄れなかった。

「というか、あの2人は周囲にピンク色のオーラを撒き散らしながらそれには見向きもせず自分たちの世界に浸るなんて、もう少し周りの人のことも考えたらどうなのかしら」

「ああ、たつくんがちーちゃんの太もも撫でたあ！ うらやまゴホンゴホン！ けしからんよ！」

「はあ！？ いや、なんで千冬もほつたをピンクに染めてるの！？ いつもなら確実に拳が顔面に突き刺さってるところよ！？」

大声を出している彼女らも周りのことを考えるべきだということは
気にはいけない。

恋する乙女にそんなことを気にしている暇などないのだから。
まあ、それは千冬にも通ずるものだが。

「たーちゃん落ちついて。これはきつと罠だよ。孔明の罠なんだよ」

「確かにあれは罠だわ。ハニートラップという名のね。千冬もなか
なかやるようになったじゃない。もともと強敵だったのに、そこま
でやられたら勝ち目がない様な気がするわ」

というか、ない。

自分たちがハニートラップ（死語）で仕掛けても千冬を優遇する辰
巳に千冬がハニートラップを使えば確実に差が広がるだけだ。
それなのに上から目線で称賛するのはどうなのだろう。

「たーちゃんそろそろ諦めなよ。今なら第三号としてたっくんハー
レムに入居できるよ？」

「いえ、ここはアメリカ軍人として負けるわけにはいかないわ。意
地でももぎ取ってみせてあげる」

出来れば辰巳のあれをもうほしい、というのが世界中の男子の願
望。

そして束はもうハーレム形成へと動き始めている。

まずは一夫一妻をどうにかして、というところから始まるのだろう。

「それじゃあたーちゃんはもうたっくんのハーレムには入れな
」

「入るわ、今すぐに」

きっぱり。

アメリカ軍人の誇りなどこの程度のものであったということだ。

まあ、前向きなのが悪いこととは言わないが、少々諦めるのが早過ぎる様な気もする。

「そうだよーちゃん。人間ときには諦めが肝心だよ。ちーちゃん一人に独占させるより幸せはみんな分かち合った方が良いからね！それにそこからでも一番を取る方法なんていくらでもあるんだし！おもにテクニクで！」

「ええ、そうね。タツミじゃなければ私は一生誰も好きになれる気がしないもの」

ナターシャはただの一目惚れなのだが、逆にそれが運命を感じるらしい。

親がそうであったように、軍人として軍内部の者と結婚して軍人の子供を作るのだらうと、未来にこれといった希望を抱いていなかったところに現れた王子様なのだから、当然と言えば当然であるが。ナターシャとしては、一目惚れですぐ覚めるような恋ならどれだけマシだったことか。

近付けば近づくほど、話せば話すほど辰巳の世界に引き込まれていくのだから、もうこの気持ちはどうしようもない。

「やっぱりずるいわね、タツミは。人のことを好きにさせておいて放つたらかしなんて紳士のすることじゃないわ。自覚はないのでしようけれど」

「自覚があってやってたら東さんはたつくんを無理矢理襲ってるよ」

「殺しはしないのね」

「だってたっくんが死んじやったら意味無いでしょ？ 既成事実をつきつけておけばたっくんは身動きできないし、一生束さんのもの出来るから一石二鳥だよ！」

「考えることが高校生のそれではない様な気がするのだけれど……
気にしたら負けね」

とはいうものの、束にそんな気は更々ない。
自分で独り占めしたいという気持ちは3人の中では誰よりも強いだろうが、辰巳に幸せになってほしいという願望も強い。

どれだけ心をへし折つても土足で人の心に入って来て、自分が壊すことも自分を壊されることもないとわかったから心を許した。
その後は至極簡単で、いつもはそっけないながらも大切にしてくれていることはわかり、いつでも自分のことを考えてくれている辰巳に引かれていった、というものだ。

だから、というほどのことでもないが、自分がこうしてナターシャと楽しく会話出来たりすることに感謝して、なによりも幸せになつてほしいと思っただけのことである。

どうしてこんなに簡単に転んだのか、当人たちは誰も自分ではわからない。

「あっ、また試着室に入ろうとしてる！」

「今度は千冬だけが入るみたいね。それなのに二人の雰囲気甘いというのはいわれないわ」

「でもこれは好機だよ！ 今ならたっくんを搔っ攫つてもちーちゃ

んにはばれない！」

「奪うんじゃないわ！ 少し、ほんの少し借りるだけだから。許してね、千冬」

と、そこまで言って突入しようとしたときだった。

「ん？ メール？」

「私もメールね。誰かしら、こんな時に」

まあ、着信音で好きな人からだとわかったからこそ突撃をやめて携帯を開いたのだけれど。

『お前らには悪いと思ってる。でも、まあ、今は勘弁してくれ。千冬といえる時間も、お前らといえる時間も同様に大切にやりたいたいんだよ』

今さっき携帯を取り出してこの文章を打てるって、早打ちなんてレベルじゃありません。

「このタイミングでこれ？ なんか私たちが惨めに見えるからやめてほしいのだけれど。それに尾行は……まあ、気付かれて当然と言っただけいいくらいに声を出していたからそれはどうでもいいわね」

「にゅは〜。やっぱりたつくくんはたつくんだよ。こっちの気持ちなんかお見通しってわけだね」

「その割には鈍感で千冬の気持ちには未だに気付いていないけどね」

あんなメールを送られて来て行くものなら最早勇者だ。
二人はそんなものになる気はないので、嬉しい様な哀しい様な、複雑な溜め息を零しながらその場を去った。

「タツミはいつになっても卑怯だなあ」

「たつくんはいつつもずるばかりだよ」

わざと辰巳に聞こえる様にそう言って。

俺の幼馴染が凶悪すぎる(前書き)

最終回のような雰囲気は漂ってませんがそんなことはありませんよ？

俺の幼馴染が凶悪すぎる

なんだよ、ずるいつて……。

俺にはなんの心当たりもないのにそんなこと言われたってなあ。

まあ、今は気にしないでおくか。

「まだか？」

「まだだと言っているだろう？ お前はそんなに見たいのか？」

「いや、出来れば早く帰りたい」

「なるほど、そうか。それならばもう少しゆっくり着替えよう」

いやがらせとかマジでやめてくれ。

因みにこの問答はかれこれ十分近くやっているので、俺が早く帰りたいと言っても責められる事はまずない。

というか、ホントにいつまで引き延ばす気だよ。

焦らされても俺の気持ちは萎えていく一方ですよ？

「そもそも、さっきは『俺だけを見る』と言いながら早く帰りたいなどのたまうことが理解出来ん」

「それは関係ないだろ……。しかも人が恥を忍んで言った台詞を蒸し返すな。余計恥ずかしい」

「俺だけを見る、だったな。他の男に目を奪われることがそれほど

不満か？」

「性格悪いな、お前」

男の純情を弄ぶなんて悪女のすることだ。

声が少しだけ弾んでいるように感じるが、どうせ俺を弄るのが楽しくてそうなっているんだろう。

まったく、千冬らしからんな。

「平気で女を誑かすお前に言われたくはないな」

「俺がいつそんなことをしたよ。言い掛かりは止してくれ」

「自覚がないというのは重症だな。自分の心に聞いてみればわかるだろう」

……うん。

聞いてみたが一切わからんな。

束とかナターシャみたいな露骨な態度を取られたらわかるが、それでも俺がたぶらかしたことにはならんだろ。

そもそも俺にはそんな趣味はないんだから。

「それはいいからいい加減出て来いよ。もう着替え終わってんだろ？」

「お前が見たいと言えば出てやる」

自分で見てくれと言ったくせによくそんな事が言えるな。

「すっげえ見たい」

「……どうしてそんなに棒読みなのだ？」

「逆に問うがお前は どうしてそんなに不機嫌そうな声を出すんだ？」

「言えと言われたから言っただけなのに、気持ちを込める必要がどこにあるのか教えてほしいな。」

「見たいとは思うが、ここでそんな事を言えば『不埒だ』という言葉が飛んでくるに違いないから絶対に言わない。」

「不機嫌だからだ」

「はあ……。不毛だわ。いいから出て来いよ。さもなければ開ける」

「も、もし私がまだ着替えていなかったらどうするつもりだ！」

「べつに、どうもしねえよ」

「着替えてなかったら着替えてなかったでそのまま水着を買って帰るだけだろ。」

「なにをそんなに動揺することがあるんだ。」

「私服なんて昔からよく見せられてるんだし、どうも思わねえよ。」

「お前は女子の裸を見て動揺も興奮もしないのか……？ 変態になられるのも困るが、それもそれで困るといっつか……」

「人のことを珍しいものを見たときみたいな声で何言ってるんだ。馬鹿か、お前は」

「なんで前提が『着替えている途中』になってるのか理解に苦しむ。」

「今の発言に私が馬鹿だと罵られる点が見当たらないのだが」

「そうか。そりゃあお前が馬鹿だから気付かないだけだろ」

「ふむ、一理あるな。ならば説明してもらおうか。馬鹿な私に」

なんかいい加減相手をするのがめんどくさくなってきたなあ。

これ以上続けるのも時間の無駄だろうし、かと言って俺が折れるのも癪だ。

なるほど。これが究極の選択というヤツか。見事に嵌められた。

「まあ……あれだ。馬鹿には口で説明してもわからんだろう？ それをべつの方法で説明してやるために帰らなければならぬ。そうするとお前の選択は一つしかなくなる。ここまで言えばわかるな？」

「ああ、ここで待機だな」

あいつはカーテンの向こうで絶対に笑ってるよ。

声が漏れずとも中から伝わってくる雰囲気わかるね、俺は。

何年幼馴染やっけると思ってたんだ。

「なあ」

「なんだ？」

「そろそろこのくだらない会話をやめて出てきてくれよ。焦らされるのは好きじゃないんだ」

「そうか。私も楽しめたし、もう出る事にしよう」

やっぱり楽しんでいたのかよ。
まあいいや。これで着て来た水着を褒めたらそのまま寮へ帰ることが出来る。
そう思っていた時が俺にもありました。

「ど、どうだ……？ 恥ずかしいからあまりジロジロと見ないでほしいのだが……」

正直、千冬の水着姿は何度も見てて、もう見慣れてるからなんとも思わないだろうと思っていた。

しかし、カーテンをちょこんと持って顔を赤くしながら内またでモジモジする千冬を見たら、そう思ってた自分が馬鹿らしく感じるわ。一言で言つと、俺の幼馴染が凶悪すぎる。これに尽きるね。

「あ、えっと……」

「ど、どうした？ 顔が赤いぞ？」

「あー、いや、なんでもねえよ。うん、なんでもない」

俺はなにを焦ってるんだ！

相手はただの幼馴染だぞ？ いろいろな面でかなり凶悪だが、それでも幼馴染に違いはない。

それなのになんで俺はこんなにドキドキしてるんですかね。

「その……なんだ。かわいいと思うぞ？」

「か、かわいい！？ わ、私がか！？ 嘘ではないな！？」

「ほ、ホントだから！ ホントだからその格好で胸ぐらを掴むんじゃないか！」

「ッ！？ ど、どこを見ているのだ！ 不埒だぞ！」

俺の視線の方向は男子なら割と普通の筈だ。

というか、胸を抱く様にして俺から隠すのは俺が不審者を見る様な目で見られるので止めて頂きたい。

しかしそれを言えば何故か知らんが怒られそうなので言わないが。

「ほら、もう着替えるよ……」

「お前はもう見たくないのか……？」

そんなことを言われて本当のことを言えるか、普通。

「今度は海で見せてくれよ。今はこれで我慢しとく」

「し、仕方ないな！ 海で思う存分見るがいい！ ふははははっ！」

最近出てないと思ったたら急に出てきやがった、独裁者千冬。どことなく顔が赤い様な気がするのはい気のせいなんだろう。

それから千冬が試着室に戻り、俺は気付かれないように溜め息をついてベンチに座った。

疲れたというよりは、ホッとしたような、安心したそれ。

「着替えたぞ？」

「それじゃあ代金払って帰るか」

「そ、そうだな」

気まずい様な雰囲気を携えて、一定の距離を推し量りながら俺たちは会計を終えた。

何もしていない筈なのになんで必要最低限以外の言葉が出て来ないんだろうか。

「きよ、今日はいろいろとすまなかった。痛い思いをさせてしまったらどう？」

ゾクゾクツと、俺の背中に悪寒が走った。

心配してくれるのは非常に有り難いのだが、突然そんな事を言われると恥ずかしいというよりなにかあるんじゃないかと思ってしまう。まあ、たぶん今のコイツにそんなことを考える余裕はないと思うけど。

「いや、俺が悪かったし、あれくらいは慣れてる」

「それが申し訳ないと言っているのだ。私はお前に痛みになれてほしいとは思ってはいないのだから」

「それはスマン」

9割方千冬のせいなんだが、このしつとりとした雰囲気でそんな事を言えるほど俺も無神経ではないぞ。

「そう何度も謝るな。こっちが苦しくなる」

「そっか。そうだな。今日は誘ってくれてありがとよ。久し振りにお前と二人きりで出掛けたらめっちゃくちゃ楽しかったぜ？」

「あ、う、あ……！　そ、そういうことを平気で口にするな！　やっぱりお前は馬鹿者だ！」

「理不尽だろう、それは」

とは言うが、千冬にいつもの様な覇気がないから冗談程度なんだろう。

「それよりお前、顔赤いけど大丈夫か？」

「こ、これくらいなんともない！　いつものことだ」

「いいから。ちょっと止まれ」

いつもはもっとほんのりとピンクな綺麗な色なんだが、今日は紅葉の様に真っ赤なんだよ。

どう見ても熱がある様にしか見えなぞ。

だから俺は自分のデコを千冬のデコへと直接当てた。

「ん……。熱はないみたいだな」

「お、お、おま……！！」

「なにをそんなに」

眼前に移る顔を真っ赤にして恥ずかしそうな幼馴染を見て、思わず言葉に詰まった。

俺は路上で何をしているんだろうかと。

そしたら顔に熱が急にたまって来て、熱い。

「い、こんなところで顔を真っ赤にするヤツがあるか！ 場所を考
える！」

「さきに顔を赤くしたのはお前の方だろうか！」

「う、うるさい！ とにかく帰るぞ！ いつまでもこんなところで
醜態をさらせるか！」

「うわっ！ おい！ 引っ張るなって！」

なんでいつつも俺が悪者扱いされないといけないんだよ。

周囲からの視線が集まったから恥ずかしいのか、俺の手を引く千冬
の手の中はびっしょりと濡れていた。

「やっぱりお前は凶悪な幼馴染だよ」

聞こえない様にぼそりと呟いて、俺は照れながらも笑顔でその手に
引かれることにした。

例え地球が滅びようとも世界の頂点に立ち続けるのは俺の妹なんだよ！（前書き）

シスコンVSシスコンVSブラコン

そして一人の傍観者。

割とナターシャ回ですが、どちらかといえば自慢合戦ですのでご注意ください。

例え地球が減びようとも世界の頂点に立ち続けるのは俺の妹なんだよ！

「ねみい……」

「それは早く寝なかったお前が悪いのだろう。遠足が楽しみで眠れない小学生ではあるまいし、そんなに臨海学校が楽しみなのか？」

「お前のその自分に非はないですよとアピール出来ることがすげえよ」

「ふふん、そうだろう？」

寝めてもないのに自慢げに胸を張られてもどう反応していいか困るんだが。

まあ、その胸は自慢しても悪いものではない ではなくて。

俺が睡眠不足の元凶は千冬にあるというのにそういうことを言えることが問題だよな。

「お前こそ今日は自棄にテンション高くせになに言ってやがる」

妙に上機嫌だから、一言で言わせてもらえば不気味。

「せっかくの臨海学校なのだから楽しまなければ損ではないか。お前と海で遊ぶというのも一年振りだしな」

「私も一年振りだよ！ 今年はいっくんたちがいないけどね」

「それじゃあ私だけタツミと海に行ったことがないわけ？　なんか複雑な気分だわ。初めてがみんなの一緒なんて」

「千冬とは毎年行ってるから惰性みたいなもんだし、去年末を連れていったのは篝ちゃんの序でみたいなものだしなあ」

幼馴染で家が隣なわけだし、一緒に海に行くくらいは当然だろ。二人きりで行ったことはないけど。

去年は『千冬と行く』というより『一夏たちの保護者としてついでに行く』という感じではあったが、まあ、それなりに楽しめた。操がいなかったのは残念だったけどな。

「惰性……」

「ついで……」

「ふふつ、それじゃあ私も来年ついで行っていいかしら？」

「人の頭を掴んでくしゃくしゃするな馬鹿」

今は臨海学校へと向かうバスの中なのだが、隣が千冬でその後ろが束。俺の後ろがナターシャとなっている。

その横の二人がなにか落ち込んでいる様な気がするが、そこら辺は気にしたら負けかな。

「そうだな……。あれは妹たちを連れていくようなもんだからなあ……」

「そうだぞ！　私たちは飽く迄保護者としてついでに行くのだから保護者でないものは来る必要ないな」

「ふっふっん。これが小学生の妹や弟を持つ特権だね！」

急に元気になったのは良いが、べつにそこまで言っていないだろ。子供が増えるなら未だしも、大人が一人多くなるくらいはなにも問題ではないしな。

「つか、どっちかと言えばあいつらとも仲良くなってもらって面倒見てもらえるとか助かるとさえ思うくらいだ。」

「それは……どうなの？」

「そんなに真剣に悩まなくても勝手についてくればいいだろ。迷惑掛けるなら別だがな」

「そう？ それならよろしくね。絶対に迷惑はかけないから」

この二人の戯言を真に受けてると身が持たんぞ。

それは三ヶ月ほどコイツらと一緒に生活してきたお前が一番わかることだろうに。

「辰巳！ あれは家族間の親睦を深めるものだろう？ それにナタ―シヤを呼ぶのは違うのではないか？」

「そつだよたつくん！ うちの箒ちゃん人見知りだから金髪の白人に話しかけられたら卒倒しちゃうよ」

「そつだ！ うちの一夏が誘惑されたらどうするつもりだ！」

「はいはい。わかったわかった」

シスコン乙。ブラコン乙。

家族思いなのは結構だが、お前らは自分たちの家族を甘く見過ぎではないのか？

篤ちゃんだってそういう人と知り合うことで世界観が変わるかもしれないし、一夏もまだそんなませる歳じゃない。

唯一心配なのは俺の操の美貌にナターシャが魅入られて操を取られることくらいだ。

「やっぱりお邪魔かしら？ それなら遠慮させてもらっけど……」

「気にすんなって言ってんだろ。コイツらは馬鹿だから。それよりお前はどうしたんだよ。元気ないぞ？」

「がめついいと言わないが、いつもならもつと食い付いて来てもおかしくないんだが。」

「自意識過剰なんじゃなくて、普段からそうだから疑問に思っただけだからな？」

「そつえばそうだな。家族の話をし始めたころからだ、どうかしたのか？」

「東さんがどんなお悩みでもぱぱと解決してあげるから言うてみて！？」

「え？ ううん、悩みではないんだけど、あなたたちが弟妹の話をしているときの顔がすごく生き生きとしていたから羨ましいと思つたのよ。一人っ子だから」

「いや、なんていうか、俺たち3人はすげえ悪いことしたんじゃないか？」

俺も前世は一人っ子だったからそういう気持ちはわかるんだよな。

「だ、大丈夫だよーちゃん！ たーちゃんなら大歓迎だよ！ ね、たつくん！？」

「俺はもともと歓迎してただろうが。除者にしようとしてたのはお前らだ」

「そう言われるとなにも言えないが……すまなかった、ナターシャ。お前なら来ても良いぞ？」

こっちに非があるんだからそこは下手に出るよ。

「来ても良いっていうか、来いよ。がきんちよ3人 特に千冬の弟の一夏は手に負えないクソガキだが、みんないい子だから自分の家族みたいに思ってくれて良い」

「なっ！？ うちの一夏はクソガキではない！ 姉思いなよく出来た賢い弟だ！ あの三人の中では間違いなく一夏が一番良い子だな、うん」

「それは聞き捨てならないよ、ちーちゃん！ うちの篝ちゃんほどの良い子を差し置いていつくんが一番なんて有り得ないんだから！」

「まあ、待て。お前は二人は落ちつけよ。一番いい子は俺の操に決まっているだろう？ だからそんな不毛な論争はしなくていい。地球が滅びても操が人類の頂点にして至高の存在というのは不変なのだから」

ともすれば神を越えると言っても過言ではないね。

いや、つーか既に神を越えてる。

あ？ 俺の方がコイツらを遙かに凌駕するシスコンだ？

そりゃあ……だって、操が一番だし、仕方ないじゃんか。

いい子ランクでは二位が篝ちゃん、三位が一夏ね。

ただ一位の操と二位の間には越えられない壁が挟まれているけど。

「ふふっ、ほんとに楽しそうね。見ているこっちまで楽しくなっちゃっわ」

また気分を害されるかと思ったが、そうでもないみたいだな。

「……そうだ、いいこと思いついたぜ。来年の夏に、ナターシャに一番を決めてもらうというのはどうだ？」

「ふふん、無謀だね、たつくん！ そんなことをしても篝ちゃんには誰も敵わないよ！ それがたとえみーちゃんでも！」

「なにを言っている。うちの一夏が勝つに決まっているではないか。やるだけ無駄だが、ここで圧倒的な実力差を見せつけるために受けて立とう」

「わ、私にそんなに重要な任務を押し付けるの！？」

なにをそんなに驚くことがある。

不正なしに判断出来るのはこの中じゃあナターシャだけじゃねえか。まあ、そうは言っても操が勝つことは火を見るより明らかだが。

あの美貌は男女問わずメロメロにってしまうという恐ろしい効果があるからな。

「（言っておくが不正はなしだぞ？ 辰巳の好感度をあげようと辰

巳の妹を選ぼうなどというものならどうなるかわかるな？」

「（その脅しも最早不正の様な気がするのだけれど……）」

「（でもほんとくにたつくんの妹がいい子だと思ったならいいんだよ？ ま、篝ちゃんが一番だから有り得ないけどね！）」

いつそそのまま小さな声で3人だけで会話し続けてくれねえかな。操の話になってテンションが上がったが、眠いものは眠いんだよ。

「3人とも典型的なシスコンとブラコンよね。そんなにかわいいのかしら」

「……おい、聞いたか？」

「ああ、聞いたぞ、しっかり」

「たーちゃんはなにもわかってないね」

「な、なに？　なんでそんなに雰囲気暗くなるわけ？　え？　変なこと言った？」

まあまあ、そう動揺することじゃねえよ。
ただ、なあ？

「かわいいかなんて、聞かなくてもわかることだろう？」

「そう、日本には百聞は一見に如かずという言葉が存在する」

「つまりどれだけ言い聞かせてもたーちゃんは理解出来ないってい

うこと。だから」

「「「これを見る（見て）！」「」」

「うわあっ！？」

ナターシャが驚くことも無理はないな。

いきなり携帯を突き付けられて、その中には天使の様な幼い子供が写っているんだから、そうなってもなにもおかしいことはない。むしろ正常だと言える。

俺の操を見て驚愕しないなんて、そいつはもう人間じゃない。ゴミ以下の産廃物だよ！

「写真……？」

「ああ、全員待ち受けにしてるんだ。どうだ？ かわいいだろう？ 惚れ惚れするだろう？ 愛おしいだろう？ 抱きしめたくなくなる？ 美しいだろう？ 生きる自信が無くなるだろう？」

「なに、心配するな。そう思って不思議ではない。なにしろうちの一夏がかわいすぎるのだから」

「あゝ！ 篝ちゃん篝ちゃん！ 会いたいよおゝ！ ってなるでしょ！？」

「わかった！ わかったからそんなに近付けないで！ よく見えな
いから！

（なんかこの三人怖いわ……。目が得物を狙う猛獣のように見える
のだけれど……）」

おっと、せつかくの操の愛くるしいにこやかな笑顔がピンボケしたら操に失礼だからもう少し見易い様に離してやるか。
流石に眼前1cmでは見えなかったな。すまん、操。

……ナターシャには謝らないのだったか？

俺は操に悪いことをしたと思っただけなのであつてナターシャにしたとは思ってないから、謝る理由が見つかりません。

「へえ、3人もかわいいわね。操ちゃんは唇がぼてつとして将来かわいくなりそうだし、篝ちゃんは束ちゃんとは違う方向性だけど美人になりそうね。一夏くんも将来はかつこよくなると思うわ。
(まあ、でもタツミの方がカツコイイ……って、わ、私はなにを考えているのかしら!)」

「だろ？ だろ？ この唇がいいんだよ。でもナターシャ。吸おうとか思うなよ？ あれは誰にもやらんからな？」

「そんな心配しなくても大丈夫よ……。……タツミは私をなんだと思っただけのかしら。吸えるならタツミ っつてそんなことはこれっぽちも考えてないわよ!？」

口ではそう言っているが本心は違う筈だ。

あの唇を見てそういう風に思わないなんて人間じゃねえ。そいつは以下略。

「だよね？ だよね!？ 絶世の美女になるよ、篝ちゃんは! 世界三大美女なんて目じゃないくらいの超絶美人だよ! でも、流石のたーちゃんでも篝ちゃんはあげないからね?」

「だからなんでそうなるのよ……」

「口ではそう言ってるけど今からでも取って食いたいと思ってるに
違いないよ。だって篝ちゃんはすっごくかわいいもん」

安心しろよ、束。

篝ちゃんがナターシャに狙われることは百パーセントないから。

なんでかって？ そんなの篝ちゃんより魅力的な操という存在をし
てしまったからに決まってるじゃないか。

まあ、それはいいんだけど、もう自慢したし、寝ようかね。

「当たり前だな。うちの一夏ほど魅力的な男子はそうそういない。い
や、いないと言っても過言ではないな」

「残念だけど一人いるわ。そこはどうしても否定しなければならな
いわね」

どんなに一夏くんがかっこよくなっても、そこだけは譲れない。
だってそうでしょ？ 自分が好きになつた男の子が一番じゃないな
んて悔しいじゃない。

「なっ！？ そんなヤツ」

「ちーちゃんちーちゃん！ たっくんだよ！」

「……ああ、そうか。そうだな。一人だけいた　　ってこんなこ
とを大きな声で言うのはまずいだろっ！」

「大丈夫だよ、ちーちゃん。寝てるから」

「はあ……。聞かれないでよかったと思うが、聞いてほしかったとも思っている自分がここにるのが悔しい……」

そんなに落ち込む様なことでもないわよ。

だって千冬は気持ちなんか伝えなくてもタツミとラブラブじゃない。……自分で言うておいてなんだけど、ちょっぴりイラッとしてしまったわ。

羨ましいんだから仕方ないのよ、この気持ちは。

「それにしても、寝顔はやっぱかわいいのね」

「辰巳の寝顔が見れるのは朝起こしに行く事のできる幼馴染の特権だというのに……」

大丈夫よ。

私も束ちゃんも寮生活になってから何度か起こしに行っているから。そのほとんどはタツミが無理に早起きして邪魔されるのだけれど。

「ホントだね〜。思わず落書きしたくなっちゃっよ」

「そうだな。しかし何度か試みたことはあるが、やる寸前でコイツは何故か起きるぞ」

「やろうとしたのね……。意外だわ、そんな茶目っ気のある千冬は」

「ちーちゃんはこう見えてたつくんといるときはだらだらしてる」
とが多いからね〜」

「必要のないことを言わなくていい！」

千冬は家ではずぼらだと辰巳から聞いていたけど、本当らしいわね。なんていうか、それもずるい。卑怯よ。

その放っておけなくなる感じのギャップはなに！？
これはタツミが構うのも頷けるわ。

「あまり大きい声出すと起きちゃうよ？」

「お前のせいだろう……。しかし一理あるな。もう話はやめて、二人とも席に付け」

「それって千冬がタツミの寝顔を独占したいだけなんじゃ……………」

「隣の席を勝ち取った者の特権だ」

うわあ、殴りたくなるくらいの笑顔で勝ち誇られたわ。

こういろいろいる側面を持っているのも千冬が強い要因よね……………
でもいいもん！

タツミは窓際で寝ながら右手をだらんと垂らしてるから、それをばれないようにそっと握ってあげるんだから。

これは後ろに座った者だけが得られる特権よね。うふふつ。

……………え？ 千冬は左手を握りながら寝顔を見てる？

気のせいよね？ あはははは……………。

後半からは気分が悪そうではないんだから自分で歩けとか言ったら負け

「酔った……」

「バカだろ、お前」

「もっと他に先に掛ける言葉があるのだと思うのだけれど……っ
ぶ」

「うわっ、吐くなよ？」

いくら綺麗な女子だからってその嘔吐物までキレイとは限らん
というか絶対に汚いと断言できる。

俺にそんな変態趣味はないんだ。

「たーちゃん大丈夫？」

「乗り物酔いするならあらかじめ酔い止めを飲んでおけと言っただ
ろっ」

「乗り物酔いというか、バスの中の臭いがダメだったのよ。香水の
匂いが混じって変な臭いになっていたから、それがね」

「鼻を摘まんで臭わない様にしておけばよかったじゃねえか」

「口から入ってくると尚気持ち悪いじゃない」

ガキじゃないんだからそんな我が儘を言うなよ……。
俺もあんな甘い匂いがする中で揺られるのは気持ち悪かったが、睡眠という最強の回避方法を会得していたから割と平気だった。

「香水と言えば今日のたーちゃんはいつもと違うよね！」

「確かに……うん？ どこかで匂ったことのある香りだな……」

「な、なんでもないわ……。べつに海で匂いが消えるんだから安物を使ったとか、そういうのでは一切ないのよ？」

お前ら二人はそんなに憐れむ様な目でナターシャを見てやるな。
コイツは自分で本当のことを言ったことを気付いてないんだから。

「はあ……。おい、歩けるか？」

「無理かもしれない……うつぶ」

つまり誰かが運んでやらなければならないということか。

「ということらしいが……俺はイヤだぞ？」

「残念ながら私もそれは遠慮したい」

「東さんにそんな力はないよ！」

「ふむ。それならナターシャ、お前はバスの中で復活するまで待機してろ」

運ぶと言っても人間が運ぶのだから、もちろん揺れないわけがない。

そしたらナターシャが途中で　　なんていうことになるのは想像に易いから誰もやろうと思わないだろ？
俺もその口だ。

「それはあまりにも残酷な仕打ちだわ……。ある意味での病人なのだからもう少し優しくしてくれてもいいのよ？」

「自業自得だろうが」

「自分の非を認めたらどうだ？　ここはアメリカではないのだから、すいませんと言ったところで全責任を負わされるわけではないぞ？」

「むしろそう言わないと誰も助けしてくれないのが日本だよ？」

自分に一分も非がない状況で困ってても、手を差し伸べるのは極一部だろう。

たとえどれだけ非があっても、それを認めて助けを求めれば普通の人なら手を差し伸べてくれるんだよ、日本人っていうのは。

「うっ……。酔い止めを事前に飲まなかった私が悪かったので誰か運んでください……」

「わかればいいんだよ、わかれば。つーことで……よしっ、じゃんけんだ！」

「ここまで言ったのにまだ拒絶!？」

「自分が逆の立場ならわかる筈だろう。逃げられる道があるならそれを選ぶものだ」

「それはそうだけど、なにか自分がすごく惨めに感じられるのよ…」

「安心しろ。すげえ惨めだ」

「安心できないわよ!?!」

もう十分元気になってるじゃねえか。

これでお頼まれた通りナターシャの部屋まで運んでやるっていうんだから、優し過ぎるだろう。

そういうことでじゃんけんをしたのだが……。

「なんで俺なんだよ……」

「じゃんけんに両手を使っではいけないというルールはないからな」

「東さんの動体視力補助装置を使って見抜けない動きはないんだよ」
「!」

どう考えても東の方は不正だろうが、どうせあいつにナターシャを運べるだけの筋力はないからいいか。

千冬の方は俺の動体視力を見越して直前で出す手を変えろという荒業を使ってきたが、正攻法なので俺には何とも言えない。

「よろしく頼むわ、タツミ」

「まあ、約束だからな」

「よっくらせ、と。」

「なな、なにをしているのだ……!?!」

「ずるい! たーちゃんだけお姫様だっこなんてずるいよ!」

「騒ぐな、うるさい。コイツが吐いて俺にかかったらどうするつもりだ」

「そこなのね。もう少しべつ方向性で庇ってほしかったのだけれど」

俺が負けたから運ぶために抱え上げたのに、なんでこの二人が文句を言うんだよ。

「そんな運び方をするとは聞いていないぞ!」

「運び方くらい自分で決めてもいいだろ? おんぶして背中にかけてられたら死ぬぞ」

「そこまで!? 私も女子なのだから、もう少し優しくオブラートに包んで発言してほしいわ」

顔が見える様にしてないと気分が悪いかどうか判断できないんだよ。声で確認してもいいが、いちいち面倒だし、喋ると同時に変なものまで吐き出したらたまらんからね。

「なんか束さんも酔っちゃったかも……」

「嘘吐け」

「……たっくんの意地悪!」

「お前がくだらん嘘を吐くからだろうが！ 人のせいにすんな」

ジト目で睨んで来てもなにも出ませんよ。

こんなことでわざわざ突っ込ませて体力を浪費させようとししないでくれ。

「それならナターシャは私が運んでやろう。ナターシャも男子に運ばれるより同性に運ばれた方が目立たないからいいのではないか？」

「べ、べつに私は目立つのは嫌いではないからいいのだけれど……」

「いいよ、べつに。俺が負けたんだし、男がなにもしないというのもおかしいだろ」

負けなかったらそのおかしな行為を平気でやっていたけどな。

「勝者が運びたいと言っているのだから敗者は従うのが道理ではないのか？」

「タツミ……？」

いや、そんな縋る様な目で見られても困るだけだよ？

千冬は乱暴だけど、流石に病人を乱雑に扱う様な事はないからそんなに不安にならなくてもいい。

「千冬という通りだな」

「タツミ！？」

「うん。わかればいいのだ、わかれば。さあ、早く渡せ」

「だが断る」

なんだこの闇取引の現場みたいな会話は。

「敗者にも敗者なりのプライドっていうものがあるんだよ。わかるだろ？」

「はあ……なんだ、その『試合には負けたが勝負には勝った』みたいな雰囲気は」

「今の台詞がカッコイイと思ってどや顔してるところがまた何とも言えないわね」

「う、うんっ！ 東さんはいいと……思う……よっ!？」

東にかなり無理をされて褒められてもなにも嬉しくねえよ。

「つか、俺はそんな雰囲気は出したつもりはないし、そんな顔をしたつもりもない。」

勝手に解釈するのは御免被るぜ。

「まあいい。いつまでもこんなことしていないでさっさと行くぞ。」

辰巳がナターシャをずっと、お、お姫様だっこをしているというの
はうらやま ゲフンゲフン！ けしからんからな!」

「い」

「東、なにか言おうとしたか？」

「まだなにも言っていないのに封殺された!？」

「くだらんことを言おうとしたからだろう」

知ってるか千冬。

人間には発言の権利というものがあるということ。

「ふふっ、千冬はそんなにうらやま」

ギンツ!

「なにか言ったか？」

「な、なんでもないわ……」

俺には聞こえたよ。

千冬がナターシャを睨むときに目から出る光線の効果音がしっかりとね。

「(ねえ、タツミ)」

「(なんだよ。小声で話して、他の二人には聞かれないことなのか?)」

ちなみに二人は仲良く俺たちの前を歩いている。

「(千冬はどうして照れ隠しに暴力を使うの?)」

「(照れ隠し? あいつが照れ隠しなんてしたか?)」

会話の流れからして今し方のことなんだろう。

思い返してみても照れ隠しなんてするようなことはなかったよな？

「（はあ……難儀だわ。それで、照れ隠しかどうかはともかくとして、どうしてあんなに暴力的なの？ ツンデレにしてももう少し正統派だといいいのだけれど）」

「（そりゃあお前の願望じゃねえか）」

千冬がツンデレとか笑えない冗談はよしてくれ。

ツン暴力の間違いじゃないのか、とか言えばナターシャからも非難を浴びそうだから口には出さないけど。

「つかツン暴力って……ただの虐めじゃん。属性でもなんでもねえぞ。」

「（暴力的なのは……いろいろあったんだよ。深い詮索はあんまりするな。お前だって知られたくないことの一つや二つあるだろ？）」

「（そう……そうね。ごめんなさい）」

「（謝ることじゃねえよ、馬鹿）」

家族を守るために必要だったから、少し異常なまになっちまったんだよ。

昔から責任感があったからな。仕方のないことだとは思う。

「おい！ さつきからコソコソと二人だけで話をするな！」

「あ〜ん！ 束さんとちーちゃんだけ除者なんてイヤだよ〜！」

「嘘泣きなんかするんじゃないねえ！ わかったから歩け、ほら」
ナターシャを抱えているときに抱きつこうとするんじゃないねえよ。
まあ千冬が空気を呼んで止めてくれたからいいけどさ。

「タツミ」

「あ？ なんだよ」

「ありがとね？」

「意味わかんねえ……」

礼を言われる様なことはなにもしていないんだけどな。
俺が微笑みかけてくるナターシャから視線を逸らすと

「あれ？ 照れてる？ ふふっ、かわいいところもあるじゃない」

「……ムカつく」

満面の笑みでほったたをぐりぐりとされた。

「すげえウザい……」が、まあ、イヤではなかった気がするよ。

いろいろ突っ込みたいが、まずはその笑い方をやめてくれ

「わあっ！ ファイルスさんが坂本くんにお姫様だっこされてる！」

「いいなあいいなあ！ 私もやってほしいなあ！」

「何円払ったらやってくれる？」

旅館の中に入った瞬間に中にいた女子全員が寄って来た。

俺はそのことに關してはこれといって興味はないのだが、騒がれるとナターシャが吐くかもしれないし、そうなればみんながイヤな気分になるだろ。

それだけは避けたいな。

「そうだな……五万でどうだ？」

『どうぞ！』

こわっ！

最近の若い娘超怖いよ！

なんのためらいもなくみんなが財布の中から諭吉さんを五人も突き出して来たよ。

流石IS学園に通う生徒だ。金銭感覚がマヒしてやがる。

そもそも一介の高校生が五万も所持してる時点でおかしい。

「馬鹿なことを言うな。一般生徒に対しての商売は禁止だ。ほら、お前たちもそれを財布に戻せ」

流石俺の幼馴染。

規則や約束にはうるさいな。

「ええ〜？ 坂本くん、生徒会長権限でどうにかならない？」

「副会長が怒ると怖いから無理だ。それにコイツをさっさと部屋まで連れて行ってやらないといけないから道を開けてくれ」

「そういうことなら……」

ぞろぞろと集まって来ていた生徒たちに頭を下げると、渋々だが生徒たちは蜘蛛の子を散らす様に去っていった。

ここの生徒って随分聞きわけが良いんだよな。俺が言うときだけだけど。

ふむ、これが生徒会長の威光ってヤツか。

「辰巳、今私が恐いという発言が聞こえた気がしたのだが」

「……気のせいだろ」

「そうか。気のせいか。助けてやったというのに、そんなことを言われるとは思わなかったな」

千冬さんがいつにも増してすごんでいるなあ、何故だろう？

「……ごめんなさい。それとサンキュ」

確かにさっきのは俺が悪かったし、深深と頭を下げ謝罪と礼をするのは道理だろう。

「わ、わかればいいのだ、わかれば！」

「なんで顔を赤くしてんだよ。まだ怒ってんのか？ 悪かったって言ってるだろ？」

「だから顔を近付けるな！ 怒ってなどいない！ さっさと歩け、馬鹿者！」

いや、怒鳴ってるし、顔も赤いし、どうみても怒ってるじゃねえか。すぐに許してもらえとは思ってはいないが、些細なことなんだからもつと軽めに怒ってくれよ。

「なんだよ、意味わかんねえなあ」

「私にはタツミの頭が意味わからないわ。わざとやってるの？」

運んでやってる俺をそんな猜疑の視線で見るな。

「わざとって……なにがだ？」

「はあ……千冬。これはずっと昔からこうなの？」

「人のことをこれ扱いするな」

「そうだな。昔から何一つ変わってないぞ。少しくらい変わればいいものを。単細胞生物なのではないかと疑わされる」

「それはいくらなんでも酷くないか？」

「まあ、昔から変わって今になっていたら完全に劣化だものね」

安西先生……！！

会話がしたいです……。

つか、流石に無視は酷いだろ。それに劣化とか言われてるし。

「たつくくくくくんっ！」

廊下の向こうから突進して来るうさ耳が今日はやけに光って見えるぞ。

いつもはどす黒い何かが渦巻いている筈なのに。

「東！ 今確かにお前の優しさを受け取った！」

「ふにゃ！？ 同意を得た！？ 今ならたつくくに飛びかかっても

合法

ガシッ

「ナターシャに迷惑が掛かるからやめておけ」

普段なら鬱陶しい筈のタツクルをかましてくる東が異様に愛おしいぞ……！？

まあ、それも千冬の手によって見事に封殺されたわけだが。

「あ〜んっ！ たつくくんがせっかく東さんを求めてくれたのに期待に応えられないなんて！ あたしって罪な女！」

「静かにしろ、東。旅館の方に迷惑を掛けると申し訳ないだろう。それといくら騒いでも私の手からは逃れられんぞ？」

「あ〜……う〜……。ちーちゃんの握力が日を増すごとに強くなっ
ていつてるよ……」

どんな鍛え方をすれば日ごとに筋力が増すんだよ。

それはいいとして、そろそろ束がまた危ない。トラウマ的な意味で。

「千冬もそろそろ放してやれよ。束も二回目はやって来ないだろう
から」

「たつくん……！　なんか気を使って優しくしてくれるたつくんが
怖い！」

「前言撤回だ、千冬。いいぞ、もっとやれ」

人の気遣いを容赦なく無碍にしゃがって、そんなヤツは隅っこで埃
でも食べていればいいんだ。

「あ〜〜〜！！　ウソだよ〜！　束さんいい子にするから離して！
死んじゃう！」

「大丈夫だ。俺はお前がそんなに簡単に死なないと信じてる」

「無駄な信頼！？　たつくんの意地悪！　うわ〜〜〜ん！」

泣き始めたが、涙が一切零れていないので確実に嘘泣きだ。

なんで俺が意地悪なんだよ。元はと言えば束の責任だと思うが。

「あれ、いいの？　束ちゃんすごく辛そうだけど」

「いいんだよ、いつものことだから。それに束なら対策してるだろうし」

「対策？」

「ああ、いや、なんでもない」

対策っていうのはあれだよ。いつぞやのレーザーみたいなもんだよ。かれこれ一年半以上アイアンクローを喰らい続けても懲りないんだから、痛みは身体へと通ってないんだろ。

痛みを緩和する装置とかをどこかに隠し持ってるとか、そういうナノマシンを体に埋め込んでるとか、ISの防御性能を利用してるとかそんなところに違いない。

「だからお前たち二人は二人だけで仲良く会話をするな！」

「べつにいいじゃない。仲睦まじきことは美しきことよ？」

また千冬は怒った様子で束を引き摺りながら歩きだしていた俺たちに追いついてきた。

いろいろと突っ込みたいところはあるが、怒ってばかりで難儀なヤツだな。

「わ、若い男女が旅館でくっつくのは不埒だと言っているのだ！」

「お前……この状況でそんなこと言っなよ」

夏だし、暑いし、俺だっつくっ付きたくてくっ付いてるんじゃないんだ。

コイツが酔っからいけないんだよ。

「うるさい！とにかく男女が二人きりで密着するのは不埒だ！」

「子供かよ……」

「子供ね……」

そりゃあ、まあ、不埒なのかもしれんが、離れる訳にもいかないだろ。

それと千冬の声がすぐく五月蠅くて、旅館にとっても迷惑掛けるってことは気付いてないんだろっか。

「くっ……！仕方ない。ここはお前たちが変な目で見られない為だ。決して私欲を満たすためではない。お前たちのために私もくっ付いてやるっ！」

「私はべつにそういう目で見られても問題ないのだけれど」

「俺もねえよ。っーかそうやって見られても所詮は誤解なわけで、すぐに解けるからどうでもいい」

そもそもこうやってナターシャをお姫様だっこしてるところも冒頭でかなりの人数に見られたけど、なんの誤解も産まなかつたぞ。

「お、幼馴染が誤解されるといっうのは気持ち良くないからな！これでも幼馴染のためだ」

「それってただ千冬が私のことをうらやん」

「なにか言っただか？」

いろいろ言いたいことはあるが、とりあえずその笑い声は迷惑だからやめろって……。俺まで変な目で見られるんだから。

「「はあ……」」

溜め息を八モつても仕方ないよな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1376w/>

俺の幼馴染が凶悪すぎる

2011年9月26日18時33分発行